

自分に自信が無い最強パーティーメンバーがパーティーを辞めたが
る件について

しらいし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

味方に辞められたら困るけど、味方がみんな自分に自信が無かったりしてすぐ辞めようとして困る。

カクヨム様にも投稿始めました。

目次

1. 自分に自信がない最強付与魔導師がパーティーを辞めたがる件について	1
2. 自分に自信がない最強シーフがパーティーを辞めたがる件について	7
3. 自分に自信がない最強黒魔導師がパーティーを辞めたがる件について	13
4. 奇跡の聖女がパーティーを辞めたがつてる……のは俺関係くない？	19
5. 王国最強聖騎士が俺にめっちゃ興味があるらしいんだけどもしかして	24
6. シルの師匠、レオを観に来る	28
7. 自信満々な五龍の一人が喧嘩を仕掛けてきた件	33
8. 王国最強聖騎士が謝りながら喧嘩屋を引き取りに来た件	37
登場人物紹介&小話（11月20日追加）	42
9. テロリスト集団『四罪』、出番無く壊滅する	48
10. 初手スライディング土下座『翠玄武』	55
11. 王国一の宝？ 興味あるね！	60
12. 金のルドラン像（二体目）	67
13. サン・ブリジビフォア祭①	71
14. サン・ブリジビフォア祭②	77
15. サン・ブリジビフォア祭③	84
16. 俺、『白獅子』辞めます	90
17. お互いに偽名身分詐称、これもう分かんねえな	94
18. デイスカウントショップ『ホンキ・ドーテ』	98

19.	「また野盗か」	103
20.	乙女ルーラン、爆進す	108
21.	止まらないリオンコールと増える観客	113
22.	マジク母、謎ばかりばら撒く	118
23.	裏の話とリオンを待つ最恐の敵	122
24.	赤いタオルを掲げる意味とは	127

1. 自分に自信がない最強付与魔導師がパーティーを辞めたがる件について

俺は良くある(?) 転生者だ。転生の経緯なんかは一切覚えていない。5歳の時に前世の記憶が戻った。まあ、転生したからといってただのオタクの記憶しかないので前世がどうだったとかは割愛する。別に転生特典とかも何も無いし、神様やらから目的や使命を与えられた訳でもない。

ここはテンプレかよと思える程の剣と魔法の世界だ。まったく嬉しくない。剣や魔法はスキルが無ければ剣は大したことがないし魔法は使えない、要は才能依存の世界である。世知辛い世の中である。俺は勇者とかではない。というか勇者は今のところ存在しない。魔王とかいないし。モンスターや人間と敵対する魔族はいるが、人間と仲良い魔族も少数いる。今現状は、世界は危機に瀕している! みたいな状況ではなく、大陸にあるいくつかの国家が人並みの生活をするだけの運営がきちんと成されている……みたいな感じだと思う。ぶっちゃけ冒険者としてその日暮らしを頑張っていた身なので全然その辺は詳しくない。

一応、最高ランクであるSランクのパーティーリーダーとしてギルドからも評価され国からも称号を与えられ英雄視されている者ではあるんだけど。

違う。そうじゃないんだ。

うちのパーティーメンバーが凄すぎてイカれているだけなのである。

俺自身はちょっと普通に毛が生えた程度の人間である。最近頭部がストレスで薄くなってきた気がするが、一応普通よりはちよい上くらいだと思いたい。

「私……パーティーから抜けようと思うの。私がいるせいでパーティーの評判も悪いし白魔導が使えない付与専門の魔導師なんて荷物でしかないから……」

「いつも言ってるだろう？ シルはパーティーの要だつて。シルの付与魔導は最高だ。一回で複数の付与を、しかも無詠唱だぜ？ 他の誰がそんな事出来るっていうのさ。評判？ うちSランクパーティーだぜ？ ただのやつかみだよ」

「でも……付与魔導が不人気でみんな極めようとしなからつてだけで、私はこれしか出来ないから仕方なくこうなつたっていうか……」

この世界のパーティーメンバーといえば、基本構成は前衛が二人、タンクとアタッカー。そして後衛として回復役の白魔導師や探索役を兼ねアイテムを使いこなすシーフ、後衛攻撃役として黒魔導師かアーチャーの五人で構成する事が多い。パーティーメンバーが増え過ぎるとコストが高過ぎて任務で手に入る金では赤字になるからだ。世知辛い。

付与魔導は確かに不人気である。そりや回復出来る白魔導師のほうがいいのは分かる。奇跡の聖女と言われる人に会った事がある。組んだ事もあるが、彼女なんて死んで無ければ、いや首がちよん切れても死ぬ前に全快に出来る。魂が消滅する前に元の状態に復元して回復させるのだ。ネトゲとかで例えるなら、ダメージくらう前提の置きベホマで攻撃を喰らいながら全快、死ぬ前提で置きザオリクで死んだ瞬間復活みたいな事を平然とやる。意味分らない。あの超人気の聖女様が白魔導師だから、付与魔導しか使えない人間となれば相対的に価値が下がると思われるのだ。

ちなみに聖女様の一番ヤバイ所はどうあつても死なないからゾンビアタックを前衛が行える事である。尚、そのゾンビアタックを行った前衛の精神はだいたい壊れるからあんまりやらないと言っていた。あんまりって事は何度かやったんですよね分かります。俺何回もやったなそういえば。何が聖女様だ。

ただ、そんな奇跡な聖女様と比べてもシルはやばい。その辺の木の枝に『破壊』を付与し、その枝でオークを叩けばオークが粉微塵に粉碎するのである。そりやあもうパーンと弾けるのである。なんで？

とまじでビックリしたのを凄く覚えていて。『防御』を付加してくれば多分砲弾を撃ち込まれても蚊が止まったレベルである。モン

スターの打撃でダメージを受けた覚えが数回しかない。『対異常』も完璧。しかも普通は一人に一つしか付与出来ないのにこの前なんか十個くらいバフ掛けられてた。チートである。回復魔導？ ダメージも異常も入らなきゃいらなくない？ほんと俺なんかと一緒に申し訳ない。この娘凄すぎるんだよ。

「シルが居なかったら俺なんてこの前のドラゴン討伐でも死んでるんだぞ？ まず一撃目のブレスで吹き飛ばされながら丸焦げだった。シルが『対ブレス』と『対熱』の付与魔導を掛けてくれていたお陰だ。その後の一撃でドラゴンを真つ二つに出来たのだって『力』と『斬撃』の付与魔導を掛けてくれていたからだ。そうじゃなかったら分厚いドラゴンの皮膚なんか俺程度が斬り裂けるもんか」

しかもドラゴン討伐の時、他のメンバーが留守だったアンド緊急依頼で街にSランクが他に居なかったから、まあSランクなんてほとんどいないんだが、ともかく二人だけでの任務だった。回復役？シルが入れば要らない。だって大した怪我しないもん。自分で道具袋から取り出した薬草むしゃむしゃするだけだわ。

「ち、違うよ！ レオならあんなブレス一振りで薙ぎ払えるしドラゴンだってレオの剣技なら切り裂けたもん！」

「出来るか！ 俺のスキルがゴミなのは知ってるだろ。シル、いつも言ってるだろ。俺お前が付与魔導掛けてた状況だったから勝てただけなんだよ。なあ頼むよ。辞めないでくれよ。……もしかして引き抜きか？ 確かにうちはパーティーメンバーに平等に分けてるから取り分少なく不満かも知れない。……他のメンバーの取り分は減らせないが、俺の取り分からなら、分けれるぞ。流石に全部はちよつと無理だけど」

黒魔導師やシーフは装備に消耗品も多く、少し取り分多めにはしてあるが、それは消耗品分としてシルにも了承は得ている。が、時間が経ち、やっぱり納得がいかないというのであれば、ここは俺の財布から出すしか無い。いや黒魔導師は消耗品が多いは一般的な話で、うちの娘は消耗品とか必要無さそうだけど、お菓子とか服とか買って欲しいからなんやかんや理由付けてお小遣い渡してるだけなんだけど。

正直シルはいつか魔王なんて存在が現れて、勇者なんて人間が魔王討伐とかするのであれば、俺なんかより勇者の所に居たほうが世界の為には絶対良いんだろうけど。そうでもないならうちに居て欲しい。マジで。

「ち、違うよ！ お金が欲しいんじゃない！ っていうかもっと少なくても全然大丈夫だよ！ それに付与魔導しか使えない白魔導師に引き抜きなんてある訳ないよ！ シーフのスズさんや黒魔導師のマジクちゃんじゃないんだから引き抜きなんて……」

「え、あの二人引き抜きの話来てんの？」

シーフのスズ。戦闘は出来ないが探索系のスペシャリストである。恐らくこの世の探索系スキル全てを極めてるんじゃないかと思えるくらい凄い。例を言うとダンジョン探索の時に、彼女が先頭に入れば罠は100%回避出来る上に一度も戦闘にならずに最下層まで辿り着き、お宝をゲット出来るレベルである。

パーティーメンバーに入る前は悪党貴族から貴金属を盗んで恵まれない平民に金を配るなどしていた正義の怪盗としての裏の顔を持つイケメン系美人さんである。尚、胸が平らでシルエツトだけ見た警備の人達から男と断定されていたので、俺も任務で会うまでは男だと思っていた。色々あってパーティーに入ってくれた。

マイナススキルとして戦闘関係がからつきし、どころか完全に出来ないというコンプレックスを持つ。彼女もたまに辞めようとする。困る。

黒魔導師のマジク。メガネっ娘である。じゃない、超が付く程の高火力黒魔導が使える。多分人類側最高火力を持つ。その代わり、その辺の人間でも属性は二つ三つ持つにも関わらず、単一属性の黒魔導しか扱えない。ちなみに俺は一つも無い。そしてその属性が六属性の中で一番不人気の土属性というのが彼女のコンプレックスである。しかも火力が高すぎて、初期魔導ですら宮廷魔導師の最高火力を超えるので迂闊に使えない始末であり、魔導のコントロールをうっかり誤ったりするドジっ娘でもある。出会ったときは超精密にコントロールしていた気もするが……。なので彼女が魔導を披露する場合

はほとんど無い。が黒魔導を使ったらどんな相手でもオーバーキルである。彼女もたまに辞めようとする。困る。

「……分かった。シルが辞めるなら俺も辞める」

「ええ!? 駄目だよ!? レオが『白獅子』のリーダーなんだよ!? せっかく国から認められて『白獅子』を名乗る事を許される所まで来たんだよ!? やつと王国に『五龍』の一角として認められたんだよ!」

「いやそんなのシルと比べたらどうでもいいし」

「ふえ!?」

元々冒険者としてソロだった時に俺の名前、レオから前世の和名で『獅子』というパーティー名でギルドに登録していた。んでコツコツ、生きるのに困らない程度に任務をこなしながらスキルを磨き、いや磨かれなかったんだけどやってきた訳なのだが、パーティーメンバーが一人加入するにつれて、メンバーが全員強すぎてホスグルブ王国の最高の称号である『五龍』の一角に数えられるまでになっている。『白獅子』なんて望んでない。めっちゃ断つたのに無理矢理押し付けられた。

ちなみに現『五龍』唯一の平民出身であり、民間ギルド所属としても唯一である。割と憧れの的らしいがぶっちゃけ自分の力では無いのでかなりどうでも良い話である。

ていうか正直、うちのパーティーに来る依頼が、『白獅子』とかいう称号のせいで難易度やバくなり過ぎて誰か一人でも欠けるとすぐ無理ゲーになるので誰か辞めるのであればマジで辞めたい。

「……そんなにレオにとって私が必要?」

「当たり前だろ」

「……分かった。もう少し頑張る」

「本当か!? 助かるよ! ありがとうシル!」

なんとかシルはまだ辞めないでくれるらしい。しかしスズとマジクに引き抜きの話があるとかいうのが気になる。いま二人ともパーティーを離れてるのが不安を煽る話である。

……どうしよう。

2. 自分に自信がない最強シーフがパーティーを辞めたがる件について

シルが師匠の所に行きたいというので一旦パーティーから離れる事になった。辞める訳ではないので泣く泣く許可した。シルがいないと死ぬ可能性が宝くじの当選確率から一番くじを買い占めた時にラストワン賞を貰える確率くらいまで跳ね上がる気がするが、シルは師匠の元へ帰る度に意味が分からないくらいパワーアップして帰ってくるので諦めた。

別にもう能力上げなくていいので一緒にいて欲しい。

今は入れ違いで帰ってきたシーフのスズと二人で『白獅子』に依頼が来ていた新ダンジョンのマッピングやらをしつつ攻略中である。まあぶっちゃけ俺は後ろに付いて歩いているだけなのだが。

王都ブリジビフォアにある貴族専用ギルドからの依頼。この依頼のミソはダンジョン内の完全なマッピング、及び宝具やアイテムの確認、そして完全攻略『してはならない』という事である。

更に美味しいアイテムやお宝が有っても手を出してはいけないというおまけ付きである。貴族パーティー様の為に残しておかなければならない。むしろそういった類のアイテムが無かった場合は貴族ギルドから支給されたアイテムを設置して帰らなければならぬ。多少パクってもバレないだろうが信用はとても大事なのでやらない。くそ面倒臭い。が、貴族専用ギルドは王族の絡みもあるのでやるしかない。やってるのはスズ一人なんだけど。

「うちが貴族様の為にダンジョン攻略するのって皮肉効きすぎじゃない？」

貴族共の悪事を暴き、悪事で貯めた金銭を奪い民にばら撒く『怪盗ルミナーレ』。それがスズの裏の顔だ。

「まあね。でも断れないからさ。スズが居てくれて助かるよ。……そういうえばシルがスズに引き抜きの話があるって言ってたけど……まじ?」

「断ったけどね」

セーフ!! スズが居なくなったらこんな面倒な任務二度と完遂出来ない。っていうかダンジョンの罠に掛かって何度死んでるだろうか分からない。ぶっちゃけスズ以上のシーフなんて存在しないと思ってる。戦闘が出来ないなんてデメリットにならないくらい探索スキルとその使い方が全人類一上手いと俺は思ってる。戦闘に関しては相手の攻撃スキルに吸い寄せられるとかいうマイナススキルと戦闘中に設置した罠は味方に掛かるとかいうマイナススキルとアイテムを投げてでも明後日の方向にしか飛ばないとかいうマイナススキル持ちなので大分アレだから参加しないで貰ってるが。

「王都久しぶりに帰ったけど『白獅子』、大層な人気みたいやで?」

「『怪盗ルミナール』には負けるだろ。勝つ気もないし。ていうかスズだって『白獅子』じゃんか」

「……なあレオっち。やっぱりうち、パーティー抜けるべきやと思うんやけど」

「いやいやいやなんで今の話の流れでそうなるの。スズがいなくてうちのパーティー成り立たないんだって。あ、やっぱり引き抜きか? そうなのか?」

スズの定期的発作、パーティー抜きたい病発動。いやほんと勘弁して。

「あほ。レオっち以外と組むならソロでやるわ。いや怪盗なんて言われてるけど、うちぶっちゃけ犯罪者やん? 『民の英雄』『白獅子』のレオの隣に居ていい訳ないと思うんよ。王都に帰って、酒場やらでレオの話で盛り上がってるの聞いて改めて思っちゃった訳」

「俺が良いって言うてるから良いじゃない。『民の英雄』？　いつも言ってるけど『白獅子』みんなが凄いだだけで俺じゃないんだって。正義の怪盗カッコいいじゃん。俺も平民だし貴族の悪事を暴くのは気持ち良い側だぞ。バレなきゃ平気だって」

「……もしバレたらレオの名声に傷が付くやんか。うちのせいでそうなるのは嫌や」

「名声？　は、それこそどうでもいいね。そうだな、もし怪盗ルミナールの正体がバレて引き渡せとか言われたら……マジクに魔導ブツパしてもらおう」

「いやいやそこは俺がなんとかしてやるとか言う所ちやうん？」

「俺がマジクに頼み込む！　……知ってる？　マジクが最近新しく作った魔導。水を砂に変える魔導なんだぜ。範囲はなんと王都を囲めるくらい」

「うわ……えげつな。王都中の生活水を全部砂に変えられるって事？」

「いけるってマジクは言ってた」

「あの娘はほんま……レオっちの為なんやろうな」

「それに俺以外にはバレてないんだろ？」

「まあ……そうやけど」

ちなみに怪盗ルミナールの正体を知ったのは本当に偶然である。予告状を出された屋敷の悪徳貴族から警備の依頼を嫌々受けた俺は一応持ち場らへんで待機したと見せ掛け、こっそり屋敷の誰も見えないような場所で戦士の初期スキル、パリーの練習をひたすらしてた。ほんとひたすらパリーの練習をしていた。どうせ捕まえるの無理だし捕まえる気も無かったからである。

パリー！　パリー！　パリー！　パリー！　パリー！　パリー！　パン！

ん？　なんか音した？　と思って剣先を見ると、完全な隠密で気配をゼロにしていたスズが偶然屋敷の屋根から目の前に飛び降りてきて、それで俺のパリーによって身に付けていた顔を隠す仮面が弾き飛

ばされたらしい。

これはスズのマイナススキルによって相手の戦闘スキルに近付くと吸い込まれるように接近してしまうというスキルのせいらしい。いつもならその身体能力でなんとか相手の技を避け、急接近したのを逆に利用して不意を突くように離脱するらしいが、ただ弾く、というこのスキルとの相性は最悪だったとの事。

……まあ相手がなんにもしてこないのにいきなりパリイする奴なんていないからな。

「ん？ 男だと聞いてたのに美人さんだな」

「!?」

「……あれ？ もしかして孤児院で子供達の面倒見てた姉ちゃんか？」

「!?!?」

「……行きなよ。俺、裏手でサボってる駄目雇われ平民ギルドマン。ここで暴れたら俺がサボってたのバレるだろ？ ほら仮面返すから」

とかなんとか会話をしつつ、その日も無事、怪盗ルミナーレは仕事を完遂。怪盗ルミナーレに完遂されるという事はその貴族の悪事は暴かれるという事であり、そしていつもの事でもあるのでいちいち無理矢理警備に引っぱりだされたギルドマンにお咎めもないので任務失敗という結果と少ない金だけ貰って任務は終了。

任務が終わったので面倒事になる前にさっさと王都から離れようと思ったのにわざわざスズのほうから俺に接触してきて、なんやかんや有ってたまに組む事になったのだ。その時は今みたいに固定メンバーでは無かった。俺に固定のパーティーメンバーが出来た事を知ってスズも加入してくれたのだ。やっぱ他に女性メンバーがいると安心出来るって事だろう。

「……でもなあ」

「スズ、俺『白』なんてどうでもいいんだから」

『五龍』の称号をどうでもいいなんて言うのレオっちだけや。歴代の『五龍』は全員国の歴史に名を刻んでるの知らんの？」

「いや俺王都の教育受けてないからそんなの知らないし。俺には過分過ぎるし」

「何言うとるん。『五龍』最強の聖騎士、王国騎士団団長『黄龍』ロサリアと御前試合やって引き分けた男が」

「いやアレはスズも知ってるだろ。シルのバフが凄すぎただけだし。それに引き分けじゃなくて負けだし」

無理矢理王国に引っぱりだされて組まされた試合。俺が本物か確かめる為の試合。いや死にたく無いと思ってシルにバフ掛けて貰ったものの、ロサリアさん強すぎて防戦一方でバフが切れて剣折れ、降参した無残な試合である。

尚、結果としてその辺の武具屋で安売りされてた量産型の剣で、聖騎士様の聖剣技を戦士の初期スキルパリーのみにて技を全部防いだ事で驚愕された上、剣が耐久限界超え折れたので降参宣言したら「私を立てる為にこのようなナマクラで、しかも実力を隠したまま無傷で……王よ。この試合、私の負けです」と何故かロサリアさんまで敗北宣言をしたので引き分けになったのである。

相手の剣を折ったので勝ったでええやんけ。安物？　シルが入ればどんな剣でも聖剣に生まれ変わるんだもん剣なんてなんでもええわ。パリーしか使わなかったって？　パリーしか使う暇無かっただけなんだよな。

シルには私のせいで負けたとか言われて泣かれて大変だったんだから。いやシルがいなかったら勝負にもなっていないわ。

「……ていうか、シルおったらさ、うち、いらんよね？　ダンジョンの罠だってなんだって、シルおったらノーダメでいけるんちゃう？」

「いや無理だろ。シル自身が罠に掛ったら、シルが驚いて集中切れて魔導解けて全滅するわ」

「せやったら、レオっちにうちが必要なん？」

「必要不可欠。証明に全裸で街を逆立ちで一周して来いって言われたら喜んでやってくるレベル」

「いや英雄様がそんな事したら洒落にならん呪術師が現れたって国がパニックになるわ。……まあ、その、なんや。気持ちには分かったわ」

「辞めないでくれよ？」

「せやな。レオが居てくれて言うならしやーないわ」

「じゃあずつと一緒だな！」

「ほんまそういうところ……」

「なんか言った？」

「言ってへんよー」

3. 自分に自信がない最強黒魔導師がパーティーを辞めたがる件について

ヒトと魔族のハーフ。ヒトからも魔族からも嫌われて、捨てられた所を竜神王に拾われ育てられたという恐らくこの世の中のキングオブチート。耳がピンっと立っていて俗に言うエルフ耳みたいで可愛い。それが眼鏡っ娘マジクである。……竜神王って何なんと思つて他力本願で調べた所、神みたいな存在と王立図書館で記載されている文献を見た事があると、奇跡の聖女さんから聞いた。博識で助かる。もう組みたくは無いけど。定期的に接触してくるのやめて怖いから。まあそんな育ちなので常識は欠落しがちだし「私また何かやっちゃった……？」的な事も多々あるが、小首を傾げる仕草が可愛いのでよし（現実逃避）

マジクは定期的に竜神王の所に帰って近況報告をしたりしている。神の使いともいうし、お爺ちゃん大好きっ娘とも言う。そして竜神王も彼女の事を溺愛している。……正直、マジクの報告次第では人類が滅びそうな気がしないでもないが、マジクが本気で魔導ぶっぱすれば国を滅ぼすなんて余裕そうなので、どのみち結果は一緒だからいいよね（現実逃避二度目）

一度マジクに連れられて竜神王に会った事がある。……ヤバかったなあ。見ただけで「あ、神様やん」って認識しちゃったわ。あっちからも「この世界の者ではないな？」とか言われたし。魂の色が違うとかなんとか。知らんがな。わい神様転生とかじゃないねん。チートも貰った記憶ないねん。気付いたらなんか前世の記憶あつたくらいやねん。

マジクはそれを知って「……レオも一人ぼっちなの？」と俺に親近感湧いたみたい。まあ10歳の時に両親死んで兄弟もいないから仕方なく冒険者になった身なので、マジモんのぼっちではあったんですけどね！ スラムに身を寄せるかマジで迷ったけど、どうせなら冒険者やるかって苦行を選択したが、それが今に繋がってるなら良い選択

だったんだと思う。多分。きっと。メイビー。

マジクとの出会いはギルドの依頼。東の砂漠に城が現れたから調査して欲しいと、ギルドの室長室に呼ばれて内密に依頼された奴だ。城が現れたって何？　って聞いたけど状況が分からない上に調査に出した人間が軒並み行方不明になっているとか言われたので、やりませんとハッキリ断ったのに無理矢理いかされた。雇われギルドマンの辛い所である。

まだ固定パーティーも無かった時だ。奇跡の聖女クルスさんも街に滞在していたので彼女にも頼んでくれとギルド長に頼み、俺とは既に（何故か向こう側からの依頼で）何度か組んでいたので快く引き受けてくれた。やっと頼ってくれましたねとか言われたけどなんで君は俺と組みたがるの？　貴女貴族ギルド所属なのに問題にならないの？　そんなにゾンビアタックやりたいの？

まあそんなこんなで砂漠にやってきた俺とクルスさんは本当に砂漠に城が建っていて驚いた。中に入って調査するべきか。いや調査しなきゃ駄目なんだろうけどみんな行方不明になっている場所に入りたくない。

普通の冒険者はとりあえず中に入る選択をするのに慎重ですよねとクルスさんに言われるが無視。そういうところ良いと思いますとか言われてるけど無視。いやだってクルスさん、ぶっちゃけ胸がデカ過ぎて見ないようにするの大変なんだもん。俺クルスさんと会話する時、胸見ないように必死に眼だけを見てるの分かってくれよ。性的過ぎるねん貴女ほんと。

とりあえず近づいて外周の確認をとクルスさんに了承を得て、外壁に触れる。違和感。……この外壁、岩じゃなくて砂、いや土？　色は付いてはいるけど質感がとかペタペタ触っていると外壁から無数の突起が現れて俺を貫いた。いや比喻じゃなく貫いた。でもクルスさんと一緒だから死なないんだなコレが。死ぬほど痛いけど。服、ボロボロだけど。

「なんで死んでないの？」

外壁の上に現れた、裸の少女は無機質な視線をこちらに向けた。「魔族!」と臨戦体制に入るクルスさん。魔族は激レアな存在としてヒト側からは認識されている。そして悪であると認識されている。歴史上、魔族が絡む事件は国を揺るがすものばかりなのだから。

俺氏、考える。仮にこの城が彼女によるものだと。さっきの突起も彼女によるものだと。……城サイズを精製出来て形状の部分変更も思いのままとかヤバくない? まあ俺を殺しかけたのは、超常の存在の土俵に不用意に入り込んだのが悪い気がしないでもないし死んでないから勉強代みたいなもんかと、俺はもっていた剣を投げ捨てた。

「レオさん!」

「おーい、砂漠で裸だと熱くないか? 服着ないのか?」

「……服って何?」

「服ってというのは……そうだな、俺や隣の美人さんが纏ってる布の事かな」

「……こんな感じ?」

そういうと彼女の周りに砂が吹き、クルスさんと同じ服を身に纏った。

え、今の何? 魔導なの? 無詠唱で? ……俺の仮説、もしかしなくても当たってないこれ? 横のクルスさんも驚愕してるがな。

「……それで、なんで死んでないの?」

「白魔導とは、ヒトを救う為にあるのです」

「いやクルスさんの場合は加虐も入ってると思うわ俺」

「……レオさん?」

「しまったつい本音が」

「……私にそう言うの、レオさんだけですよ?」

「いやほんとごめんなさい」

ニツコリ笑うクルスさんに恐怖する俺。その様子を見て外壁上の少女はクスリと笑った。

「なんだ笑えるんじゃん。こつち来なよ。飴ちゃんをあげよう」

「……飴ちゃんって何？」

「甘くて美味しい舐めて楽しむ食べ物だ。……クルスさん、こつそり白魔導最高攻撃魔導の詠唱するのやめてくれる？」

「気付いていましたか……。しかし相手は」

「ぶつちやけるけど、多分効かないよ。レベルがっていうか、世界が違うでしょ。分かって抵抗しようとしてるんだらうけど」

「……白魔導師というのは魔族とは相容れないものです」

「教団の教えでしょ？ 聞いてるけどここは任せて。失敗して死んだら宜しく」

「……分かってます。レオを死なせません」

ちよつぷりシリ阿斯が入りながら、その後なんやかんやあつて外壁上の少女こと、マジクの面倒を見る事になった。ヒトと魔族のハーフだと言う彼女の面倒を見る事となり、彼女に罪は無いとクルスさんも納得しながらも、この後教団生まれ教団育ちの聖女さんとは少し疎遠になる。いやむしろそんな育ちなのに納得してくれただけクルスさんの懐の深さが凄いと思う。

少し後である。一度街に戻りマジクに服を買い、街で食事をし、宿を取り、マジクが人並みの生活というものを初めて体験してその全てに驚き、その反応を可愛いと思いつつ眺め、再び砂漠に戻った。もう城はいらないやとマジクが手をかざすと城が一瞬で消滅した。その後歩きづらいからここもいいやと地面に手をかざすと、砂漠が消え草原が広がった。

広大な砂漠が一瞬で消えたのである。いやマジかよと思いつつマジクを見るが涼しい顔をしている。今ので消耗ゼロなん？ ……まあ考えても分からないからいいかと思いを放棄し、ギルドには城と砂漠が

消えて草原になりました。なんでかは分かりませんと報告。ギルドも超常現象過ぎて頭を悩ませていたが、人間如きで分かるレベルを超えているので事実のみを受け入れるしかないという事態だった。

その後は色々あった。俺の認識が甘かった。魔族が忌み嫌われているという事。それは教養のない田舎であれば変わった耳の少女くらいで済んだ。だけど、その特徴的な耳は都市部では迫害の対象となる。マジクには申し訳ないが外套を街中では被ってもらう事になった。それはマジクがヒトの生活に慣れ、ヒト並みという事を覚える度にマジクの中で疑問が拡がっていった。

「なんで嫌われるの？」

そう言われた時、ごめんと謝るしか出来なかった。自分の力の無さがこの時ばかりは恨めしかった。

「私のせいでごめんなさい」

何度かそう言われた事もある。マジクのせいじゃない。それはもう言わないでくれと言われる度に言った気がする。白魔導師の変わり者、山の中で伝説の魔導師とかいうヒトに育てられた人間で世間知らずだったシルは、白魔導師でありながらマジクと初めから仲良くなった。俺達の中で一番の常識人シーフのスズも、孤児院育ちでたくさんの子供達の面倒を見ているだけあってマジクの事を妹のように可愛がった。

時間が経ち、マジクが言った。

「ヒトとはどういうものか。どういう世界なのか。体験してきなさいとお爺ちゃんに言われたの。だから報告しなきゃいけないの」

ほえー。魔族のお爺ちゃんかな？ いやマジク一人を投げ出すとか最低やな説教してやるから着いていくわ意気揚々と着いて行った

結果、神様に出会うとか誰が思うだろうか。いや説教はしたけど。神の気配に押されながら「一人で砂漠にいるとか可哀想だろうが！マジクの気持ち考えろや！」とか言った気がする。その後、マジクと竜神様だけで話をして、またマジクが戻ってくる事になった。正直もう戻ってこないかと思っていた。

まあでも定期的に問題起こしながらパーティー辞めたがるのはいつもの事なんだけどね！　今みたいに。

「レオ、やっぱり私パーティー辞める……」

今日の前に広がる惨状。ギルドの依頼で盗賊団のアジトに行って全員捕縛して欲しいとかいう、それ冒険者の仕事じゃなくない？　つていうものである。

スズが探索じゃないなら近くまで行ったら待機してるわと離れ、私が出ると張り切ったマジクが初期魔導を詠唱。山が吹き飛んだという事態である。初期魔導とは一体……。うん、そうだね。プロティンだね（現実逃避三度目）

「……前より手加減出来るようになって偉い！」

「でも……その……」

「相手はゴミなので問題無し！　盗賊がネグラにしていたせいで他に人間が近寄らなかつたので問題無し！　マジクは可愛いからヨシ！」

現場猫並みの判断力によって今日もうちのパーティーは平和である。尚、吹き飛んだ山はマジクが再び成型したので元通りである。捕縛に関してはマジクが魔導で発掘した盗賊を一応ギルドに提出した。うん、まあヨシ！

4. 奇跡の聖女がパーティーを辞めたがつてる……
のは俺関係なくない？

「レオさん、私も今度『五龍』の一角になるんですよ」

「はあ、おめでとうございます」

レオさんはさほど興味がなさそうに私に祝辞を送ります。いえ、本当に興味が無いのでしょうか。その様子に私は思わずクスリと笑ってしまいました。『五龍』に興味が無い、というのは私が知る限り、この世界でレオさんくらいなものです。マジクさんですらレオさんが『五龍』となった事で興味を持ちましたからね。

「来月、『朱天狐』を与えられます。これでレオさんと並びますね」

「いや、俺とクルスさんは羽虫とオーク程の差があると思いますけど」

「私を羽虫なんて言うのレオさんくらいです」

「いやどう考えてもオークでしょ。俺どころか素の力は『黄龍』よりヤバい怪力……」

「沈めますよ?」

「ごめんなさい」

レオさんは軽口を叩きます。私に対してそんな風に接してくれるのはレオさんくらいなものですよ。それが心地良い、と私は思います。ふふ、幼馴染の『黄龍』ロサリアに話す事がまた出来ちゃいますね。私がいともレオさんの事を話すのをロサリアも良く聞いてくれますからね。

……怪力は余計ですけど。ちよつと力が人より強いだけです。……多分ロサリアくんも私相手だと手加減してくれてるのだと思います。きつとそうです。ロサリアも自己強化すれば私より全然力がありますし、レオさんだってシルさんの強化があればロサリアより強いです。

シルさんの付与魔導。あれは、うん。特殊過ぎますね。何度か見て理解はしました。シルさんに魔導を教えた人は少しおかしい人です。人によってはまったく効果が出ない、ある意味レオさん専用魔導ですからね。いえ初めからそうでは無かったようですがそう変化してしまっただけか。

どちらにしろ私には使えません。多分私はどこかで心が折れそうな気がします。レオさんと一緒だから成り立っているというか。羨ましいです。

「ところで私、今のパーティーを辞めようと思ってるんですよね」
「へー」

「私がパーティーに入れば『五龍』が二人ですね」

「シルがいるので間に合ってます。大丈夫です。安心して他のパーティーを探してどうぞ」

レオさんは相変わらずつれません。冷たいです。嘘です冷たくありません。私は知っています。レオさんの弱さも強さもあり得ない心の在り方も。

レオさん個人の力というのは、出会った時は失礼な言い方をすれば『凡人』の中では強い、一般ギルドの中では『中の中』と行った所でした。いえ、そうですね。その域まで行っているのも不思議なくらい才能には欠けていました。ただ一つ、『眼』が良かったそうですね。身体能力の無さとスキルの無さを『眼』の良さでカバーしてそこまで強くなっていたようです。

見聞の旅で訪れた街のギルドでは信用出来る前衛として彼を紹介されました。『実力が信頼出来る』ではなく『人となりが信用出来る』というギルドにしては珍しい紹介でした。

ええ、それは正しかったと思います。粗野な方も多く、私に、その……変な視線を向けてくる方も多い中でレオさんは違いましたから。気遣いが出来ない訳ではなく、むしろ気安いというか、一緒にいて気が楽になる空気を作るのが上手な方でした。

驚いたのは、初めから私に全幅の信頼を預けてくれたという事でしょうか。いくらギルドから紹介されて私の話を聞いているとはいえ、いきなり自身の命を私にポンっと預けてくるような真似をするなんて。いえいくら気心が知れていても普通は不可能だと思います。それは幼馴染のロサリアくんだってそうですから。

「じゃあ俺が前に突っ込むから死んだら宜しく」

「え、あの……！　ちよつと！」

「うええ……痛え……」

「当たり前です！　傷は治せても痛いに決まってます！」

うん、初めて組んでこれはおかしいですね。モンスターパレードに巻き込まれたのは偶然でしたが、普通は見ず知らずの人間の為に命は懸けません。逃げます。それは当たり前な事だと思います。レオさんは『話を聞いた感じイケると思った』とおっしゃいましたが、話を聞いただけで実行するのもおかしいです。ええ、おかしい事だらけですね。

「そういえばロサリアがまた試合をしたいと言っていましたよ」

「敗北でいいのでお断りします。え、いやシルの付与魔導のお陰だったって誠心誠意伝えたはずなんだけど」

『『それも含めて君の力だ』ってロサリアも言っていたでしょう？　力も使えなければ意味を持たないものですよ。むしろ色々感心していましたよ」

「使えるようになったと思う度に、シルがパワーアップしてまた振り回されるんだよなあ」

「……そうですか。また魔導の力が上がっているんですか」

「そうなんですよ……って痛い!?　なんで!?　つねらないで!?　そのオークみたいな力でつねらないで!?　千切れちゃう!!」

「千切れたらくつつけてあげましょうね」

「怖すぎるんですけど!」

〃〃その後〃〃

「あの……レオ、クルスさんがパーティーに入るって私、もういらなの？」

「断ったから！ シルがいれば他に白魔導師なんていないから！」

〃〃おまけの日常〃〃

「〃〃♪」

「マジクちゃん楽しそうですね」

「可愛い」

「ほんま可愛いわ」

久しぶりに四人揃ったの任務である。トンボ的な虫が先についた紐を握り、ルンルンで鼻歌を歌いながら先頭のスズの横にいるマジク可愛い。

『白獅子』にくる依頼というのはそもそも数が多いわけではない。ぶっちゃけた話、ギルドが設定している単価が高いからだ。ギルド内最高ランクで『五龍』のパーティーだからと単価もバカ高い。なので必然、依頼主は貴族や豪族、商人ばかりになるから面白くない。

なので今回の任務の内容は、『祭りの為のでっかいシンボルツリーを街の中心に植えて、街中の子供達みんなで飾り付けをやるうぜ』作戦の為に、巨木を取りに森に来ているのである。依頼主は俺。理由は楽しそうだから。もちろんギルドや領主の許可は取ってある。みんな快く引き受けてくれた。感謝。

クリスマスツリーやりたいだけなんですけどね！

「向こうやな！」

案内人はもちろんスズである。別に森に詳しい訳ではない。スズのスキル『鷹の目』で地形を俯瞰して確認、マーキングして案内してくれている。本当は周囲100mくらいを俯瞰するスキルらしいが、

スズの話聞くに王国内くらいなら俯瞰出来るらしい。マーキングまで可能で他のスキルと併用化。Google MAPやんけ。いやGoogle Earthか？どっちにしる凄い。予め森で一番でっかい木をスキルで探してくれていたスズに感謝。

「大きい……」

モンスターにも出会わず、実に平和な散歩を楽しみたどり着いた巨木の元。マジクが呟いた通りデカイ。例えるなら屋久島の縄文杉つて所か。いや生前に屋久島行った事ないから適当に言ってるけど。あれ樹齢2000年とか3000年とかだっけか？……まあこの世界の樹木とかめっちゃ丈夫そうだから引っこ抜いて植え替えても大丈夫……だよな？ 森林保護とかいう概念存在しないから何にも言われないとは思うけど。

「じゃあシル、バフお願い」

「もう掛けてますよ」

「さすが仕事が速いね」

よっこいせつと。地鳴りを響かせ巨木を引き抜く。うん、軽い。片手で持てそう。バランス崩したくないから背中で持つけど。一步脚を踏み出すとドシーンという轟音と震度2くらいの振動が大地に響く。やり過ぎワロタ。今更引けないので街中までこのまま縄文杉（仮）を背中に背負って歩く。マジクとスズはいつの間にか木の先端に、スズがマジクを抱えるように座っている。実に平和である。尚、木がデカすぎて街の外壁から門の中に入らなくて郊外に植える事になり適度な大きさの木を取りに行き直しました。なんか英雄の樹とか言われて街のシンボルになったらしいです。

5. 王国最強聖騎士が俺にめっちゃ興味があるらしいんだけどもしかして

同性愛者なの？　なんて嘘である。多分ロサリアさんから見ると珍獣である俺に興味があるのだろう。

王家の八男として生まれたロサリアさんは幼い頃に宰相閣下の元へ養子に出されている。簡単に言うとな政治の駒。そして宰相家では継承権も持たされていない。王位継承権は八番手で、この国の武の最高峰という事で有力視されていた事もあったようだが、本人の要望で放棄したようだ。政略結婚が嫌だった説とかあるが、この辺は面倒だし詳しくもないので置いておく。

王家であれ宰相家であれ、貴族の中の上澄みであるロサリアさんは俺みたいな平民は珍しいのだろう。まああくまで珍しいってだけだと思うけど。王国騎士団も多くは貴族で構成されている。平民にもその門は開かれてはいるが、余程の実力が無ければ入団は出来ない。つまり少数は平民もいるのだ。

そんなロサリアさんがなった王国騎士団団長というものは、コネや名声で成れるものではない。王国騎士団団長は五龍の中でも最高位と言われる『黄龍』となる事が決まっているので、王国騎士団は貴族然としていると見せかけて中身は超が付く実力主義である。過去には平民出の『黄龍』だっているくらいにはね。

「ゼエー……ゼエー……」

「素晴らしい。付与魔導が無くても王国騎士団でもやっていけるよ」

「ゼエー……手加減……されて……これかよ……」

今現在、どうしても試合がしたいというので二度と俺に興味を持たないでくれよという意思を込めて一人で出向いてバフ無しでボッコボコにされた所である。聖剣技一度も使わない舐めプされてて笑う。

「戦士系下位スキルを中位相当まで威力を引き上げる。並の努力で出来る事ではないよ。スキルの威力が変質する事がそもそも珍しいのに尊敬に値する」

「……それしか……覚えられなかったんだよ……くそ……」

「確かに、スキルも身体能力自体も特筆すべき所は無い」

「……はつきり言うねえ」

「だが失礼な言い方に聞こえるかも知れないが、君は所謂天啓を与えられなかった、『凡人』と言われる人達の中で最も強いのではないかと私は思う。君の剣技、動き、全てに君が出来る限りの努力を重ねてきた軌跡が見えたよ」

この世界にはスキルがある。戦士スキルを極めると戦士の上位スキルを……と繰り返すこの世界に置いて、戦士系最高位である聖騎士スキルを極めているロサリアさんはマジもんの天才である。もちろん、スキルの一部は覚えずともその上の位に上がる事もあるが

なんとなく、自分が持っているスキルが分かる人間もいれば、一生分からずに過ごす人間もいる。下位、中位、上位、最高位と分類され下位のみしか習得出来ない者は所謂『凡人』、上位以上を習得出来る者が『天才』と称される。つまり俺は天から『凡人』認定されたのである。

「よくそこまで鍛えたものだ。それにその見極める『眼』だ。経験を重ねて素晴らしい域にいる。普通ならそれを使いこなすには余程の能力が必要だと思うが、良き仲間を持ったものだ」

「……王国騎士団でもやれるって？ 新人騎士くらいか？」

「まさか。君は仲間の力抜き能力だけでも小隊員はこなせるさ」

「……それ新人騎士と変わらなくない？」

「入ったばかりとこなせるでは雲泥の差だよ。私も一番下からの叩き上げだから良く分かっているつもりさ」

ロサリアさんは生まれて俺との御前試合まで生涯無敗だった。ま

あ引き分け扱いだから無敗なのは変わらないんだけど。ロサリアさんは恵まれた天啓に驕る事も無く努力を続けた男である。そして俺程度を褒めるほど、出来た男でもある。しかも今の試合だってロサリアさんの個人邸にて完全に人払いを済ませた上での気遣いの男でもある。

「はあー……。やっぱりロサリアさんすげえわ」

「私が君と同じだったとして、私は君ほどの努力を重ねる自信がない。私は君を尊敬するよ。うちの団員はきつと私と同じ感想を抱くだろう。スキルの変質というのは並の努力で得られるものではないことは皆知っているからね」

「いや逆に俺がロサリアさんと同じ天啓を貰えてたら、俺ロサリアさんみたいに研鑽を重ねねえわ。ロサリアさんはどうしてそこまで努力出来たんだ？」

「……生まれつき『天啓』を授けられていると宣言された幼馴染がいてね。特別扱いされて育てられたその娘に格好つけたかったんだ。格好つけて、その娘に並んで示すことで君は一人じゃないって伝えたかったんだ」

「え、何それエピソードまでイケメン……」

「だが私はやりかたを間違えたらしい。……結局、彼女を一人ににしてしまっていた事に気付かなかった。格好の悪い話さ」

なるほどなあ。ロサリアさんがお見合いの話を断りまくってるってクルスさんも言ってたが、貴族の結婚なんて所謂政略結婚が主のはずで、相手次第で思い通りに立場を優位に固める事が出来るだろうに、なんでだろうとは思ってはいたが、その幼馴染が好きなのか。純愛じゃんか。

「でもロサリアさんはそれに気付いたんだろう？ その幼馴染にはもう良い人がいるのか？」

「……想い人はいるようだね」

「なら大丈夫だよ。ロサリアさんなら大丈夫！ 顔も良い！ 性格も良い！ 王国騎士団長！ 『黄龍』！ 欠点なんて無いじゃない」
「そうだといいんだけどね」

ロサリアさんは困ったように笑う。

「いやロサリアさんで無理ならこの世の男じゃ無理じゃない？」

「そうだね。もしかしたら、この世の男じゃないのかも知れない」

「え……何それこわ……」

「冗談だよ。本当になんとなく、そう思った事もあるってだけさ」

「もしくは相手が好きなのが実は同性だとか？」

「いやそれは無いかな。その相手も私は知っているし」

「じゃ、じゃあ幼馴染の前でその相手と試合して格好良い所を見せつけるってのは？」

「彼女の為に力を身に付けたのは間違いないんだけどね。それを誇示する事で靡くような娘じゃないんだ」

「あー……やっぱロサリアさんが惚れてるだけあって、そういう感じじゃないんだな。だからこそロサリアさんが惚れたって事か」

「……この話はこの辺りにしよう。それよりギルドでの任務の話とか聞かせてくれないか？ 君の話は私には新鮮だね」

「俺達にとつてはその辺に転がってるような話なんだけどそれでも？」

「ああ、構わないよ。美味しい酒も用意してある」

「ありがたいけど高級酒は合わない気がするんだよなあ……」

「ふふ、この前君と抜け出して行ったあの酒場のお酒さ。あの酒場と同じツマミもある」

「あーあれか！ あれは美味かったもんな！ でも安酒だぜ？」

「高くても安くても、美味しいものは美味しい。君から学んだ事の一つさ」

ロサリアさん……本当幸せになって欲しい。

6. シルの師匠、レオを覩に来る

レオの朝は早い。

早朝のランニングはギルドマンを始めた頃からの日課で今も続けている。日が明けた頃、水浴びをして汗を流し朝食を取る。一人だったり、パーティーメンバーと一緒にだったり様々だが、大概はマジクと一緒にである。

マジクはレオがランニングを終えて、街に買った一軒家に戻ってきた頃に起きて朝食の準備を始める。この一軒家はそこそこ大きく、パーティーハウスでもありシルやスズの部屋もあり、二人も滞在時はここで過ごす。スズは王都に戻る事も多く、シルも師匠の元へ出向く事が多いし、マジクも竜神王の元へ帰る際は長期にいくなくなるのでレオ一人になる事も多い。

朝食を終えたレオは、マジクと二人で片付けを終えた後、とりあえずギルドハウスへ向った。

「おはようございます」

「おはようございます」

受付の女性の挨拶を笑顔でレオは返す。雑に返したり返事もしない粗野なギルドマンも多いので、実はこれだけでも好感度が高くなる事をレオは知らない。尚、マジクは色々あつて人見知りになってしまっているのもレオのマントをギュツと握りしめてレオの後ろからひよこつと顔を覗かせている。

この街ではレオのパーティーメンバーだという事は知られているので、さすがにマジクがフードを脱いでいても誰かに後ろ指を刺されるという事はないのだが、それでも警戒心があるというのは余程嫌な事があったのだとレオもマジクの様子に心を少し痛める。

マジクからすれば自分がそういった扱いを受ける事で、レオが傷付くのを知っているので警戒していると言ったほうが正しいのだが。

「今日はお二人なんですね」

「ええ、シルが師匠にまた呼ばれたとかで急いで街を出たので」

帰ってきたと思っただけでまた慌ててシルが街を出ていった。念話が飛んできたとか言っていたが、スズもマジクも「念話」って何？ とポカーンとしていた。レオはなんとなく察する事は出来るが、つまりシルの師匠が『オリジナルスキル』を開発し使ったという事であった。いや『オリジナルスキル』の開発ってなんでもありかよチートじゃないとレオは羨ましがった。

レオがクルスから聞いた話、シルの師匠は「恐らく『伝説の魔導師』と呼ばれている人」との事だった。白魔導と黒魔導を極めた唯一の人、との事であり、その活躍は嘘か誠か百年程前から噂があるのかなんとか。

レオはなんとなく、それ人じゃないんじゃないか？ と思ったが、白魔導も極めていると教団から認識されているという事で、人じゃないんじゃないかとクルスに言うのは辞めたようだ。

「今の所、『白獅子』に依頼は来ていませんよ」

「そっか、ありがとうございます」

またニコリと笑いレオはギルドを後にした。今日のノルマは完了である。さて、近くの森で修業でもするかと思ってパーティーハウスに戻り準備をしていると思ったより大分早くシルが戻ってきた。ちょうど玄関近くにいたので出迎えたレオがシルと魔女な格好をしたロリっ娘を迎えた。

「ただいま戻りました。あと師匠も一緒に……」

「邪魔するぞ！」

「おかえりシル。……ふむ」

「なんじや言いたい事あるか？」

「いえ、シルのお師匠さんですね。初めましてレオと言います」

「ほう？ 見かけで判断はしないという訳じゃな？」

感心感心と頷くシルの師匠と、魔女ロリ百歳超え、まあそういう事もあるかと前世の感覚的に謎の納得をしたレオは謎に噛み合った。

「ワシがシルの師匠リイナじゃ。 齡二百五十になる。 労われよ？」

「分かりました」

「くつくつく。シル。レオとやら凄いのう。 信じておるぞ。 いや、ワシも嘘は言っておらんが、初見で信じる奴なぞおらんかったぞ。 ちなみに人間じゃないぞ」

「あー、やっぱり？」

「信じている上に敵意も無し、か。『民の英雄』とか言われているそうじゃがそれでいいのか？ ワシが害悪を持ってこの街に来ておるのかも知れんぞ？」

「あ、あの！ リイナ師匠はそんな人じゃなくて！」

「いいから黙っておれシル。 ……でどうじゃ？」

「いやー……もし害悪とかいう奴があるならわざわざシル連れてここに来るかなって思うけど、そもそもシルを育てた師匠がそういう……ヒト？ マゾク？ だとは思わないっていうか」

「魔族自体に敵意も無しか。 そのこのハーフの子の影響か？」

「レオは誰にでも優しいもん！」

奥からこつそり覗いていたマジクが叫んだ。 なるほどなるほどとリイナは頷いた。

「ハーフの子……確かマジクと言ったかの。 誰にでもは違うぞ。 お主らの敵には恐らく容赦せんだろう？」

「それは……そうだけど」

『民の英雄』なんて勝手に言われてるだけだし。 俺は仲間優先だからね」

「うむ、お主はそれで良いだろう。 シル、良い男を見つけたな」

リイナが訪れた理由は単純であった。シルが付与魔導の強化したい旨をリイナに申し出て修業し、スキルの変質に成功したのち。

「……でも回復魔導やつぱり覚えられない。……街の人以外は私達の事を悪く言う。『戦えない英雄の荷物』だって。レオはその度に怒ってくれるけど迷惑掛けてる……。レオに迷惑を掛けるのは嫌……。迷惑掛けて嫌われたらもつと嫌……。嫌われるくらいならレオから離れたほうが良いのかな……」

と、いつも通りシルが項垂れて戻るのを躊躇していたからだ。シルから聞いた話。常にレオは付与魔導の素晴らしさを周りに語り、探索スキルの重要さを周りに語り、その強力過ぎる黒魔導の凄さを周りに語り、パーティーメンバーの凄さを周りに説いているらしいのだが、実際戦っている様子はレオ一人であると周りから見られ揶揄される事もあるのだとか。

その事をシルは多く悩み、リイナはそのレオとやらの様子を観に来たのだ。だが、元々そんなに心配はしていない。本当に興味本意で観に来ただけというのが正しい。

何故ならシルの付与魔導を『相互の信頼』の分だけ効果が出るように変質させたのはリイナである。それはレオがシルを信頼するだけ、シルがレオを信頼するだけ効果が増す。つまり相手がシルを信頼しないと効果が出ないある意味恐ろしい魔導に変質しているのである。だから最早レオ専用となっているし、その魔導の本質を見抜いたクルスが、効果が増した事を確認した事でレオの皮膚を千切りかけたのである。

『相互の信頼』が無ければ成り立たない魔導などという、不完全とも言える魔導が完全に成り立っている時点でリイナは心配していないのだ。ただ、魔導を変質『させる』事が出来る、しかもある意味人を絶望させかねない形に変えたリイナはやはり人とは感性が違うと言えるだろう。私には使えないとクルスが言うのも無理はない。

「久しぶりに面白い男に出会ったのう。何かくてやりたいくらいじゃが……。ふむ……。うん？」

チヨコチヨコとレオの元と駆け寄りリイナがレオを見上げた。レオもリイナを見下ろす形で観る。そう、観た。

「お主の目……。左目か。無理矢理繋げておるのか？」

「!? 分かりますか」

「なるほどのう。よし、ワシが安定させてやろう。何、その類の人体改造は得意分野じゃ安心せい」

「……一氣に不安になってきた」

「マジクとやら。お主も手伝え。この眼からはお主に近い力を感じる」

「分かるの!？」

「はっ！ ワシはシルの師匠じゃぞ？」

「うん！」

「シル、お主もじゃ」

「は、はい！」

ニヤリとリイナは笑う。過去にマジクの母親から奪われ、代わりに無理矢理埋められたマジクの母親の片目、魔族の眼であるレオの左眼は確かに良く見えるが時に痛みを与えていたものだった。

7. 自信満々な五龍の一人が喧嘩を仕掛けてきた件

辛い。左眼がまじで疼く。シルの師匠に気付いたら寝かされていて、起きたらなんか終わってたんだけど。何これ左眼だけ見え過ぎて気持ち悪いんだが。

正直左眼を眼帯かなんかで隠すか本気で迷ったが、怪我して左眼を失ったみたいに関わりから受け取られたら、シルが落ち込みかねないから我慢するけどさ。

今は一人で眼を慣らす為にと街ブラ中である。元々左眼って気合入れないとそんなに見えてなかったし、見えるのも魔力の流れみtainもんしか見えてなかったから、突然視界が戻ると平衡感覚も少しおかしい感じである。

……これまた修業基礎からやらないと、色々感覚狂ってるんじゃないだろうか。しばらくは戦闘系の依頼は断ろうかな。そう思ってた矢先である。

「お前が『白獅子』か？」

「……そうだけど？」

なんかヤンキーみたいな女性に絡まれた。街の人間ではない。タミングがまずいな。この街だと実力試してみたいに喧嘩売ってくる奴ももういないからちよつと油断していた。シルー早くきてくれー。……呼ぶ手段がないオワタ。

「あの当代の『黄龍』に勝ったらしいな。『黄龍』の奴、俺とは手合わせしやがらねえくせによお」

「いやあんただれよ。それに別に『黄龍』には勝ってねえよ」

「俺はレイラ。俺こそが五龍最強の当代『蒼麒麟』だ」

「それは凄いな。じゃあこれで」

「待て待て待て待て。流すなぶち〇すぞ」

「ええ……、俺『蒼麒麟』に用事ないし」

『白獅子』は『黄龍』より強い。俺がお前に勝つ。『蒼麒麟』は『白獅子』より強い。つまり俺最強」

「おめでとう。あんたの不戦勝だ。じゃあこれで」

「チツ……、舐めんな！」

『蒼麒麟』、確か対人戦特化型で気性が荒いとかロサリアさんが言っていた気がする。拳士系だっけ。「気をつけたほうがいい。僕は立場上、相手も無理矢理は仕掛けてこないが、君には仕掛けてくるかも知れないよ」とか言ってたなあ確か！　ロサリアさん、街中で仕掛けて来やがったぞコイツ！

右眼で相手を、左眼で相手の魔力の流れを観る。右手に魔力集中、ぶっ放し系か！　視線は俺の正中線を捉えてる、速いがギリギリ避けれる！

ドゴウ！

背後から轟音が響く。流石に民家等は狙わず地面に着弾したようだが、あんな喰らったら死ぬ。何街中でぶっ放してんのコイツ頭おかしい。

「余裕ぶってギリギリまで見極めて紙一重で躲わすか、気に入らねえ」
違いますー。最速で躲してこれですー。避けた事褒めて欲しいくらいだわ。話しながらまた魔力集中……連撃、いや乱撃か!?　グミ撃ちは雑魚には効くから辞めて下さい!!　花火でも打ち上げているかのような爆音が街中に鳴り響く。

「先読みでもしてやがるみたいに器用に避けやがるな気持ち悪い！」

「……!?!」

ただひたすら速く、威力が馬鹿高いが射線が素直なお陰でギリギリ避けれる。避け……後ろに子供!?

「当たった！　……チツ、馬鹿が。ガキになんて俺が当てる訳ねえだろうがよ」

「……俺がお前を信用出来る点がまったく無い」

腹部に着弾し、爆発。身体は後ろに弾き飛び跳ね、バウンドした身体は偶然立ち上がった状態で止まった。後ろにいた子供の頭を撫で、

この場から離れるように促す。お腹から血、だらだらな状態で怖かっただろうごめんな。って流石にギャラリーが集まって来た。俺のボコられショーが始まるだけなんで解散して欲しい。

「ま、その程度じゃくたばらねえよなあ！ 抜けよ剣をよ！ ……はっ、本当に数打ちの剣を使っただけやがる！」

うるさいですー。俺には伝説級の剣なんですー。実際伝説級の装備で固めていたロサリアさんとも撃ち合えたから問題ないんですー。……シルの付与魔導があれば、ね。

「レオー」

ギャラリーからシルの声が聞こえた。身体が軽くなる。力が漲る。声のほうを見るとシルが怒りに震えるマジクを抑えながらこちらに付与魔導を掛けてくれていた。ありがとう。あとやべえ。街が無くなる。シルとマジクにいい笑顔でサムズアップして落ち着かせる。

「余裕ぶってんじゃねえぞ！」

レイラが近接格闘に切り替えた。先程までと違い、今度はちゃんとギリギリまで見極めながら拳を、蹴りを、肘を、膝を躲す。全身に魔力を溜めている一つ一つが必殺になりうる攻撃だが、俺の右眼は相手の動きを正確に見極める。

……見極めれるだけだからシルの付与魔導が無いと身体が付いてこないんですけどね！ 左眼。おいおい相手だけじゃなく街一帯レベルで見えるぞ何コレ気持ち悪。集中、集中。お、相手だけに絞れば発動の予兆っぽいので分かるな。

「くそ、当たらねえ！」

一撃の威力はロサリアさん以上。ロサリアさんがスキルを使ってるレベルの攻撃をスキル無しで打ち込む化け物。でも正直、ロサリアさんのほうが遥かに強い。攻撃が素直過ぎる。擦れば勝つみたいな感じではあるけど……。こいつ、同レベルや格上との実戦経験少ないな？ 俺なんて格上としか戦闘してこなかったレベルやぞ？

「うん、うん、そっ、んでこー」

魔力の溜め始めた部位を狙い剣の峰で殴る。魔力が分散する。相手が溜めようとする。散らす。すげえこれ相手のスキルキャンセル

出来るじゃん。溜めようとした瞬間、その部位を殴る。殴る。殴る。気が付けばレイラの全身から魔力が抜けボコボコに殴っている感じになってしまった。

膝を突いたレイラと見下げる形になった俺にギャラリィから歓声上がる。やめてコイツキレると面倒だから本当にやめて。

「街中だしこの辺で辞めよう。……この辺りの修繕費は出せよ?」

「チツ……しょうがねえな。俺の旦那にそう言われちゃあな」

「じゃあこれで手打ちで……旦那?」

「俺より強い奴を俺の旦那にするって決めてたからな! 宜しく頼むぜ旦那様!」

もしかしてロサリアさんが対戦避けてた理由ってそういう……?

いやなんかシルとマジクがすんごい顔してこっち見てるから!

この後めちやくちや誤解を解いた。あとなんかパーティーハウスにレイラが住み着いた。俺の実力は皆のお陰だから全然レイラのほうが強いって説明しても「それも含めてお前の力だろ?」って言うて聞いてくれない。なんなの本当。

8. 王国最強聖騎士が謝りながら喧嘩屋を引き取りに来た件

「うちの妹が本当にすまない」

「いやロサリア兄様が謝る事じゃねえよ」

「誰のせいだと思ってるんだレイラ！」

ロサリアさんが頭を下げるとまじでなんか申し訳なくなるからやめてほしい。てか妹だったんかい。道理で格上との対戦経験少なそうな訳だ。王族の喧嘩屋とかマジで喧嘩したくないもん。勝つても死ぬやろそんなもん。全員負けるわそれ俺冷や汗ダラダラなんだが。

「いや俺もうここに住んでるし、このパーティーに入っただけだし」

「勝手に住み着いただけだしパーティー入るの認めてないからロサリアさん引き取って下さい」

「はあ!? 俺『五龍』だぞ!? 断る理由あるのか!？」

「まあぶっちゃけ……邪魔かな」

「おいおいおいおい俺にそんな口利いた奴初めてだぞ! 流石俺の旦那だな!」

「なんで嬉しそうにするし。旦那でもねえよロサリアさん助けて」

「いや……本当にすまない」

まじで空き部屋に勝手に住み着きやがったからなコイツ。家の中で暴れられたら堪らないからなんとか説得してたけど無意味。謎にテールブルマナーとかふと出る仕草に気品があって絶対貴族出の放蕩娘だわとか思ってた。どこからか聞きつけたロサリアさんが駆け付けてくれた時マジで神だと思ったね。

「レイラさんがパーティーに入るなら私も入ってもいいんじゃないですかね？」

バーンと扉が開かれた先に現れた聖女。

……いやなんでやねんほんと。

「クルス!? 何故ここに君が!」

ロサリアさん、露骨に狼狽える。え、仲悪いの?

「え、なんでクルスさんまで来るの」

「あ、やつほークルス久しぶり!」

「お久しぶりですレイラさん」

あ、クルスさんとレイラも知り合いなの。へーそう。マジで頭痛く
なってきた。……!? シルがプルプル震え出した!?

「……『五龍』が二人も加入して……しかも一人はクルス様……もう
……私用済み……」

「シル、一回落ち着こう。用済みなんて絶対そんな事無いし、そもそも
あの二人パーティーに入れないから」

「そうだぜシル、あんたが居てレオも最大限の力を発揮するんだから
必要だろ。それになんでかクルスは入れないらしいから安心したら
?」

「元凶のお前が言うんじゃないレイラ!」

そうだお前は怒られろ。頑張れ皆のお兄様。

「白魔導の使い手が二人居ても問題無いんじゃないですかね?」

「クルス、君は神殿騎士団の最高位の騎士達とパーティーを組んでい
たんじゃないのか? 彼らに問題が?」

「辞めましたよ? 問題、ええ些細な事の積み重ねですが」

「……その問題は後で私に詳しく聞かせてくれるかい?」

「たまに不埒な視線を感じるとか、命を賭す程の信用はしてもらえな
いとかそんな事です」

「聖女である君にそんな……」

「いやクルスさんはそのちよつと胸の露出があつて謎の下穴開いてる

改造修道服着るのやめろ」

「でもレオさんはそんな視線私に向けないじゃないですか！ 後この穴は蒸れ対策ですー！」

「……神殿騎士団に正式に抗議文を送るか」

「ロサリア、王国と教団の関係が微妙な時期にやめてね？」

「しかしクルス、君が……」

「え、なんやコレ。『五龍』が四人もおるやんウケる」

ロサリアさんとクルスさんがなんか聞いちやまずそうな話まで始めて帰りたくなってきたが、ここがお家なのでどうしようもねえ詰んだわとか思っていたらうちのパーティーの常識枠がこのタイミングで帰ってきた。

「あ！ スズおかえりー！」

「おーマジクただいま！ 相変わらず可愛いなあ！」

「おースズおかえり。いま取り込み中だな」

「見たら分かるわ。クルスさんおるからシル震えてるやん」

「え、シルさん震えてるの私のせいなんですか？ 私はシルさんと仲良くしたいのですが。シルさんの付与魔導凄いですよ？ 私では絶対にあの効果は出せませんし」

「いや、あの違って、クルス様が悪いんじゃないって！」

「うーん。なあレオっち。ちよっち状況が分からんから説明してくれるか？」

「なるほどなあ。『蒼麒麟』が王族って話は初耳やなあ」

「俺が内緒にしてもらったからな！」

「んでレオっちがその『蒼麒麟』ど突き回したら旦那宣言されたと。んー、ロサリア様。レオっちの首は大丈夫なん？」

「王家としては、『蒼麒麟』の私闘に関して結果に関わらず一切の口出しはしないとしているから問題無いよ。まさか勝った相手を旦那に

する為に旅をしていたとは思わなかったが」

「だって素性がバレてたら本気でやってくれねえだろ。それに俺、大体の奴はカスれば勝ちなんだぜ。全戦全勝だったんだからいいだろ」
「だからあんな射線も動きも素直だったのか……」

「おい待てレオ。めちやくちやフエイントも混ぜてたる脳筋みたいに言うな。流石にそこまで脳筋だったら『蒼麒麟』にまで成れてねえわ」
「……え？ あれで？」

「うわ、本気で言ってやがるコイツすげえ！」

「レイラ、嬉しそうにするな。ふむ、レオ。君は身体強化無しでこの私と試合をしても技量のみで立っていられた。この意味を考えたほうがいい」

「え、ロサリア兄様と……？ 何それ化け物じゃん」

王族兄妹が呆れた顔で俺を見る。そんな顔で見られても困る。

「んー、話それたわ。で、レオっち的にレイラ様もクルス様もパーティーに加入は認めんっちゃうー訳やな」

「もち」

「おいおい別に前衛が一人増えてもいいだろ」

「そうです。白魔導の使い手が一人増えてもいいじゃないですか！」

「いやレイラ様は……旦那の件は置いといて、なんでそんなに『白獅子』に入りたいん？」

「ここに居ればレオといつでも手合わせ出来るだろう！」

「……思ったより脳筋やったわ。んー、ロサリア様。王家から『白獅子』への依頼で『蒼麒麟』との合同訓練みたいな形に取れへんかな？」

レイラ様が手合わせしたい時は毎回王家から依頼してもらおう形で

「それなら私から話を通しておけば可能だが」

「なら依頼で頼むわ。それなら王家も『蒼麒麟』の現状把握も出来て一石二鳥やろ？ レオっちも、依頼が来た時に手合わせ付き合う形ならええやろ？」

「まあ依頼なら」

「ロサリア兄様！　すぐに依頼してくれ！」

「レイラ、分かったから。……放蕩娘に首輪が付くか。スズ、君に感謝をしなければならぬようだ」

「かまへんかまへん。うちはレオっちの為に言うてるだけやし。……で、まあクルス様は……今回はとりあえずあきらめてもろて」

「そんな!？」

「クルス様、ぶっちゃけうち今回のやり方、気に入らんからなあ。気付いとらんと思うてたら大間違いやで？」

「う……でも、だって」

「いやクルス様が純粹な気持ちで暴走しちゃったのは分かるから。レオっちにも言い合せんけどな。せやから今回は引いてや」

「……はい、分かりました」

「何の話？」

「女同士の話やレオっち。クビ突っ込んだらあかんで？」

「へーい」

「よーし話は纏まったな。て訳でロサリア様。二人をよろしゅう！」

「あ、ああ。君は凄いなスズ」

「孤児院のチビ達に比べたら可愛いもんや」

あれだけカオスだった場がスズが来て一気に纏まった。流石孤児院皆んなのお姉さんなだけある。

登場人物紹介&小話（11月20日追加）

《登場人物》

《白獅子メンバー》

レオ

よくある系転生者。

戦士系スキルを底辺しか覚えなかった、スキルの才能《は》無い冒険者。色々あつて『五龍』という国が与える最強の称号である一角、『白獅子』を与えられてしまっている。仲間が凄過ぎるだけで俺は大した事ないと否定してはいるが、軽く覚悟が決め命を張る事に躊躇が無いイカれた精神性があつたり、謎に《眼》だけ良かったりするよく分からない主人公。

その眼を見たマジクの母は、即座に気に入り有無を言わず左眼を強奪し、代わりに自身の左眼を埋め込むという狂気の行動を取った。代わりに埋め込まれた左眼は、魔力を観る事が出来る特殊な魔眼であるがマジクの母的に等価交換がまだ出来ていないらしく、まだ何かしてあげようとは思っているがその行動のせいと、元々マジクによく思われていなかった事もあり近づくともマジクが殺しに掛かる為近寄れなくなった。

シル

最強付与魔導師。

白魔導師だが回復魔導は使えない事がコンプレックス。付与魔導が強過ぎてダメージなんて受けないから回復なんかいらないのだが、本人は気にしまくっており、更に奇跡の聖女さんとかいうネトゲでいう置きザオリク（死んだ瞬間復活）させるチートを目の当たりにしているので自己評価がめちゃくちゃ低い。

なので迷惑掛けたくないからとすぐパーティーを辞めようと迷惑を掛けている娘。

師匠兼育ての親は、かつて魔王を討伐した勇者パーティーの一人で黒魔導と白魔導を両方極めた唯一の魔族『伝説の魔導師』リイナ。そ

の師匠も付与魔導に関してはシルの方が上と認めているし伝えてもいるが、自己評価が低過ぎて伝わらない。

マジク

元当代の魔王になるかも知れなかったロリメガネっ娘。

人と魔族のハーフ。どちらからも嫌われて捨てられたが、この世界の頂点と言える存在、龍神王に気まぐれで拾われ育てられた。黒魔導師は複数属性使えて当たり前だが、単一属性かつ不人気の土属性しか使えない。しかし超高火力かつ器用である為、本当なら気にしなくていい筈なのにレオの前だといひ張り切ってポンコツになる。高火力過ぎて上級魔導は普段使用禁止とレオに言われている為使わないが、普段器用なのにレオの前だと低火力魔導が苦手となり周りの人間からはほとんどポンコツに見える。そしてポンコツを晒すのを恥ずかしがってパーティーを辞めようとしちやう可愛い。

育ての親の龍神王は親バカになってしまった為、娘の為なら人間を滅ぼす事に躊躇は無いので、扱いを間違えれば人類ゲームオーバーだし、なんならマジク本人も本気出せば一撃で国を更地に出来る級の魔導を扱える。実はレオと出会わなかったら龍神王もマジクも人類を滅ぼす方向に舵を切っていた可能性は極めて高い。レオと出会ったおかげでギリギリ人類は踏みとどまっている事に誰も気付いていない。

スズ

人類最高レベルのシーフスキルを持ち、悪徳貴族の資産を奪い国民にばら撒く『怪盗ルミナーレ』として国民人気の非常に高い義賊としての顔も持つ。戦闘スキルは皆無よりマイナス方向だがあまりに高いシーフスキルでお釣りが来る。

孤児院育ちで面倒見の良い優しいお姉さんなのだが、胸が直滑降かつ顔もイケメン寄りなので『怪盗ルミナーレ』が男と思われている事が、正体バレの心配は防げるが複雑な心境の模様。

悪党相手のみとはいえ、自身の行いが犯罪である事は自覚してお

り、『白獅子』の名声上がる度に自身がパーティーの爆弾となっている事を問題視しており、その事で何度もレオにパーティーを辞めると伝えているが名声なんてどうでも良いレオが必死に止めている。

《教団》

クルス

五龍の一角、『朱天狐』を国から授かった奇跡の聖女。チートではないレベルの白魔導の使い手。

幼い頃聖女として認定され教団に囲われ、その才能から幹部候補として育てられた。エツツな改造修道服を着ている。その服や自身を見る眼から、相手の人となりを判断する程度の強かな面も持つ。

神殿騎士団に所属となっているが本人は自分の立場をあんまり認識していない、いやするつもりがない。彼女自身の信者は多く、その気になれば教団を乗っ取れるくらいの人望はあるがそんな気もない。実はその事で教団の一部から睨まれている事に気付いている為、あまり本部に滞在せず全国行脚という名の放浪の旅をしていた所、レオに出会った。

自身に下心も野心も無く、それでいて無垢な信頼を寄せてくれたレオを自分の物にしたいと思ったが、暴走しがちな為に距離を取られている。

王族のロサリアやレイラとは幼馴染。ロサリアとは兄妹感覚の為、親愛の感覚はあるが恋愛とはなんか違うと思っている。

《王家》

ロサリア

五龍の一角、『黄龍』を国から授かった王国騎士団団長。王家八男だが付度無く、実力でその地位を勝ち取った王国最強騎士。

幼馴染のクルスが教団から聖女と認定された為、彼女と並び立つ為に努力を続けた男。その生まれからのコネではなく、真の実力のみで騎士団団長に登り詰めた。騎士団員は彼の命令であれば命を掛けるのも迷わないくらいの人望もある。

容姿、性格、カリスマもある上、庶民であるレオの事を友人と認めるくらい砕けた人物でもある。

権力闘争を嫌い、本人は王位継承権を放棄しているつもり（宣言もしている）が、彼を次期王にとの声は少なくない。もつと言うなら現王国最高戦力を有している為、彼が実力行使すればそれは叶うだろうがそんな気は無い。無いのだが、その事で派閥争いを繰り広げる王宮内の一部から睨まれてもいる点はクルスに似ているかも知れない。

レイラ

五龍の一角、『蒼麒麟』を賭けた王国主催の格闘トーナメントで優勝して勝ち取った、一応ちゃんと実力はあるはずのカマセ梓。

基本的にはカラツとした性格の馬鹿娘と見られている。が、ふとした所作から高等教育を受けた跡が滲み出してしまう。

実は素で行動すると貴族のお嬢様となんら代わりないというか、誰がどう見ても百点満点の本物のお姫様として振舞ってしまう（？）らしく、普段の粗暴な振る舞いのほうが作り物である。

全力の一撃の威力は、威力のみであればロサリアをも上回る。タイマンで負けた事でレオの事を旦那と呼んでいる。割と大問題。

実はレオを王国側、貴族側に取り込む為に縁談を画策されていた事もあるが本人も知らない。

セルキス

五龍の一角、『翠玄武』を国から授かった。五龍唯一の学者としての称号であるが、王家お抱えの隠密集団『ガーデンナイト』を一人で全滅させれるくらいに強いが故に王家長兄レミアハートのお抱えとなっている。

最近、水をかぶると女になって、お湯をかぶると男に戻る体質になる『娘溺泉』とかいう温泉を作る研究をしているとかなんとか。

速報。ロサリア氏、王国騎士団と神殿騎士団との合同訓練を開催し、ロサリアさん対神殿騎士団全員というなんでも承されたか分からん戦いを無理矢理行い、勝利するとかいう快挙（暴挙？）を成し遂げ、歴代最強の『黄龍』とか言われ賞賛されている模様。そして貴族側と教団側とに若干の亀裂が生じた模様。

何してんのロサリアさん。ついでに御前試合でロサリアさんと引き分け扱いだった俺氏の株が勝手に上がる始末。迷惑。

「はあー。俺もやりたかったぜ」

勝手にうちに棲み付いて寛ぎながら、クルスさんの話を聞いて残念そうにしているバトルマニアお姫様。というかクルスさんなんでおるん？

「あの……レイラさんの客として来られたので……」

あ、そうなん？ いやシルは一ミリも悪くないから気にしないでいいよ。

「でもさ、それ大丈夫なのか？ 王国騎士団と神殿騎士団の関係、政治的に」

「表向きは、両騎士団のパワーバランスを保つ為にあえてロサリアが力を見せ神殿騎士団に奮起を促した。しかし神殿騎士団側も『朱天狐』を出さず『黄龍』の力を見定める余裕を見せた、みたいな筋書きにするらしいわ。実際はロサリアの安い挑発に乗った神殿騎士団がボッコボコにされて、教団側は騎士団にもロサリアにも怒り心頭らしいけど」

「やだやだ、面倒。王宮にいらなくて良かったわ……ぜ」

「私も外に出てて良かったわ」

「あのお二人……もしかしてとんでもない話してません？」

「聞いちや駄目だシル。絶対関わっちゃいけない案件だから」

9. テロリスト集団『四罪』、出番無く壊滅する

まあ、アレよ。俺達はいくまでも冒険者であって、王家縁の者でも教団の人間でも無い訳で。あんな面倒な話をただの世間話みたいのうちギルドハウスでやるなっつーの。

……スズは料理しながらしつかり聞き耳立ててたみたいだけど、ともかく面倒事に巻き込まれる前に適当に依頼を受けて我ら『白獅子』は廃城に向かい、そこに棲みついたとあるモンスターの討伐、及び廃城の中にある、とあるアイテムを探す事になったのだ。

その廃城に着いたと同時に中から見た事が無いモンスターが飛び出してきた。うん、報告通りではあるけれども。結構色々な所を旅してきたつもりなんだけど、まだ見た事ないモンスターもいるもんだねーとか軽く考えられる見た目をしてないんだなコイツ。

モンスターが出てきたと同時に身体にシルからの付与魔導が掛かる。さすシルですわ。そしてスズがマジクとシルを安全地帯に誘導する。ここまでピクニック気分でこれたのはスズのお陰。さすスズ。マジクが「頑張れー！」と言ってくれる。可愛い。よし勝ったなコレ。

「どっせい！」

なんか獅子とか蛇とかグリフィンとか合わさったような、まるで合成獣のような奴の羽を斬り落とす。おっと口に魔力を貯め始めた。なんかされる前に返す刀で首を落とす。発動前にやろうとする事分かるの便利だねこの左眼。……首と背中に魔力発生？ うえ、羽も頭も生えてきやがった。

「なんやアレどないなっとなるん？」

「分かりません、あんなモンスター見た事ありません。レオさん！」

「こっちは平気だから適当に隠れてて大丈夫だ！ シルの付与は相変わらず完璧よっつー！」

滑るように大地を蹴り一太刀で左前足と後ろ脚を斬り飛ばす。自分でも訳分からん速さである。スキル？ 何それ使ってないよ。シルのバフ乗っていると、最近ではや下手にスキル使うより普通に攻撃したほうが強い。

うーん、にしてもまた生えてきた。不死身かコイツ。

「レオ、私がやる？」

「いやマジクはステイで。この城がいま無くなると……」

「う……やっぱり私迷惑なんだ……」

「マジク、迷惑じゃないからコイツぶっ飛ばしていいよ！」

「うん！ 分かった！」

マジクの泣き顔には勝てない俺がそう言った瞬間、目の前のカメラモンスターが消えた。うん？ 消えた？ ふとマジクを見るとドヤ顔をしている。可愛い。

「すごいマジク、どうやったの？」

「地面深くに埋めてみた！」

……え、一瞬で？ 左眼で下を見ると地面奥深くにさっきまで対峙していたモンスターの魔力反応がある。……生き埋めとか怖すぎるね。

「凄いなマジク！ ……俺の身体も半分埋まっちゃってるからそれだけどうにかして欲しいかな！」

「ぐぐぐぐめんなさーい！」

いやまあ半分だから抜け出せるけどね。とりあえず味方も沈める可能性あるから禁止で、とだけマジクには伝えといた。

そんなこんなでとりあえず廃城に入ってみただけでも。「なん

やココ?」と様々な城に詳しい事に定評があるスズが、門を開け馬鹿デカイ玄関ホールを一眼見て違和感を感じたらしい。俺にはなんにも分からん。

ツカツカと歩き正面の壁をスズが蹴り飛ばすと、壁、いや隠し扉がボタンと倒れた。

「地下階段?」

「せやな。うん、隠し階段作るにしても場所がおかしいわ」

「そうなの?」

「城やからな、そりや外に通じる隠し通路なり見られたくない隠し部屋なんて普通にあるとこ多いけど、こんなんアクセス良すぎるやろ。むしろここがメインって感じや。これ、城なの多分ガワだけやな」

「なんなんでしょう……」

「ま、行けば分かるんちゃう? みんなうちの後ろから離れたらアカンよ」

シルが不安そうに杖をギュツと握りながらスズの後ろを追い、俺はさっきの失敗で落ち込むマジクを気にしてないよーと撫でながらその後を追う。

階段を降りると自動で壁の蝋燭が光る。貴族の家にある便利な魔導が仕込まれてるななんて思いながら階段を降りると地下フロア一帯に明かりが灯った。

「ひっ……」

「……きつしよい研究しとるな」

「……ッ」

合成獣の研究施設、なんだろうなココ。切り刻まれたモンスターやらひとつひとつの巨大な水槽の中に眠る（いや死んでいるかも知れない）モンスターが浮いていたり。一番奥の割れてる水槽から飛び出し

たのがさつき対峙した奴のかな、なんて思ったりするが。

「これ受けちゃ駄目な依頼だったな。みんなごめん」

「うちの情報にも引つ掛かってなかったし、しゃーないやろ。にしても、見てもうたんどうしよつか」

「この城消す？」

「胸糞悪いから消し飛ばしたいのは山々なんだけどね。……ここ吹っ飛ばしたらそれこそ見ましたよーって言ってるようなもんだしな」

「なら見てないフリするん？　うちはそれでもええけど、絶対この研究施設の資料やら研究やら利用されるで？　貴族側か教団側かは分からんけど……タイミング的には教団かいな」

↓見なかった事にする

多分キメラモンスターを量産し戦争の道具になる。内乱の可能性大。たくさん人が死ぬ。駄目。

↓消し飛ばす

間違い無く秘密を知った事で狙われる。俺だけなら良いけど皆がいるから駄目。

「……とかどーせ考えとるやろ」

「やっぱスズには分かる？」

「いやみんな分かるわ。……しゃーないな。うちが『ルミナーレ』としてこの情報持つて教団に交渉してくるわ」

「それだとスズが危険！」

「そうだ、シルの言う通りだ」

「せやけどしゃーないやろ……って誰や！」

スズが誰もいない壁に向かって叫んだ。魔力反応も無かった筈の壁からズズズつと白衣を着た一人の女が壁から諦めた顔で出てきた。

「嘘でしょ……。絶対バレないと思ったのに」

「うちの看破スキル舐めたらアカンで。……ってあんた『翠玄武』!? 人前に出るのが嫌いなあんたがなんでおるん!？」

やはり俺の眼よりスズのスキルのほうが上ってええ、こいつ五龍の『翠玄武』!? スズの言葉と同時にシルから俺に付与魔導が掛かる。俺も皆の前に立ち、剣の柄に手を掛けた。

「ちよつ、待つて待つて! 『白獅子』とやり合う気なんて無いわ! ねえ、五龍同士でやり合うなんておかしいじゃない!？」

「え、割と皆やり合ってる気がするが?」

「いや国の最高戦力同士で何やってるの!? 馬鹿なの!？」

「それにお前を信用する理由が無いし」

そう言つて剣を抜き『翠玄武』に向ける。いや俺達の前でこそこそ忍んでた奴信用出来る訳ないよね?

「降参! 降参よ! 私戦闘能力皆無なの! 私研究者なの! 『翠玄武』って学問畑の称号なの! 知らないの!? 狙われやすいからあんまり表に出ないから顔知られてないだけ! なんでその娘が知ってるか知らないけど!」

「……つまり、この研究はお前が?」

「少しは話す気になってくれた? ちなみに違うわ。『観た』から『作れはする』けどね。……て怖い顔しないで。こんな品の無いもの作らないわよ」

「何故ここにいる?」

「全然言つても良いけど巻き込まれるわよ?」

「それはお前次第だろ?」

「……分かったわよ。巻き込まれないようにするって約束するから殺気出すのやめて。……『四凶』の一人よ。ココで研究してた奴らは」

「『四凶』……スズ?」

「『四凶』は異民族の神を崇めとる国の敵『四罪』の四柱やな」

「そ、国家転覆を企むテロリスト集団『四罪』の幹部。だからこの案件は教団は関係ないわよ『ルミナーレ』さん？」
「……ッ」

……コイツ、脅す気か？ さっきの俺達の会話もバツチリ聞いてたみたいだな。よし！ 殺そう（この間0.0001秒）

「じゃあさよなら」

「待つて！ 私が悪かったから待つて！」

「レオっち、ちよつと話し聞こか」

「……まあ、そう言うなら」

「ふう、案外冗談通じないのね『白獅子』って。私の依頼主は王家長兄レミアハート様よ。で！ ここを『四罪』がねぐらにしてたって情報から調査に来たわけなの」

「研究者が調査？ それこそおかしくね？」

「……ぶっちゃけるけど、私はレミアハート様お抱えなの。研究者なんてお金掛かるでしょう？ 貴族お抱えなんて普通よ普通。この調査はレミアハート様が私的に動いてるから私は使える駒として動かされただけ。私は最高レベルの隠密スキルを持つてる……はずなんだけど。『ルミナーレ』には敵わないみたいね」

「うん、とりあえず『四罪』なんて知らん。俺にとって今の問題は『ルミナーレ』の件だ。だからお前を殺す」

「ちよ、『白獅子』って温厚って聞いてたんだけど!? こっちは依頼主まで明かしたのに!? 私だって庶民の出よ!? 『ルミナーレ』のファンだもの、絶対黙っておくから!!」

「信用するとでも？」

「あーもう、じゃあどうしたら信用してくれるのよ!? だいたい貴方達の所にはレイラ様もいらつしやるじゃない！ 王家側の人間からすれば、貴方達と仲違いすれば人質を取られてるようなものでしょう？ クルス様とまで仲良いんだもの！ 貴方達と敵対するなんて、それこそその勢力とも敵対するようなものじゃない！」

「レオっち、そこまで。今までの言葉にウソは無いで。うちが『聴いとる』から間違いないで」

「……でも」

「うちらとアンタは会わなかった。ここの研究資料は全部あのモンスターが既に消し飛ばしとった。……誓えるか？」

「誓うわ！ だいたいね、王家側からすれば『ルミナーレ』のやってる事なんて可愛いものなの！ 犯罪バラして私財を奪って民にばら撒く、それだけでしよう？ 無能な馬鹿を勝手に制裁してくれてるんだから都合良いくらいに思ってるわよ、少なくともレミアハート様はね！ 司法があるからそんな事表立って言いはしないけど！」

「……レオっち。この娘消すのもそれはそれで面倒事になるの分かるやろ？」

「……はあ、まあスズが良いなら良いけど」

王家と教団の面倒事から逃げた筈なのにより面倒な事に関わってしまった件について。いやこんなん分かるか！

「で、調査の際に『白獅子』達と会ったと？」

「はい。あの、会ったと話をした事は内密に……」

「良いだろう。『白獅子』達はロサリアと良好な仲を築いているからな。弟が王になった時に弟が使える駒を減らしはしないさ」

「それで『四罪』の情報は手に入ったのか？」

「いえ、それがその……『白獅子』が「絡まれると面倒だから先に潰しとくわ」と言つて『ルミナーレ』から得たらしい情報で『四凶』全員を既に倒してロサリア様に引き渡されております……。近々ロサリア様が『白獅子』から得た情報を元に『四罪』の残党狩りに動く模様です」

「……は？」

10. 初手スライディング土下座『翠玄武』

「申し訳ありませんでしたー!」

バーンとギルドハウスの扉が開かれたかと思うとスライディング土下座で入室してきたのは先日の『翠玄武』。……そういやコイツの名前知らないわ。

「えーと『翠玄武』、何が?」

出掛けようとしていた俺はいきなり目の前に滑り込んできた『翠玄武』に嫌な予感しかない。なのでとりあえず腰にぶら下げてある剣に手を掛ける。その様子を土下座スタイルを崩さず見た『翠玄武』が焦りながら言う。

「話終わるまで首を落とさないと言ってくれます?」

「……お前まさか」

「いえー! 研究施設の中で行われていた研究については約束通り報告してません! でも! でもですよ!? 貴方達が『四罪』を壊滅させちゃったから出会った事くらいは報告せざるを得ない状況になってしまったので!」

「あー、うーん……じゃあクルスさん呼んでから首斬り落とすか。大丈夫。落とした瞬間にクルスさんが繋げるから死ぬ前に繋がるよ」

「ええ!?! あ、でもその感覚にはちよつと興味が無いでも無いかも……?」

「……あー、脳が理解する前に吹っ飛んで繋がるのコンボになるから感覚的にはどうだろ。首がなんか熱いくらいじゃね」

「もしかして体験済みですか!? そういった趣味がお有りで!」

「どんな趣味だ! 体験済みだけど趣味じゃねえよ!」

「いやレオっち、玄関でどんな会話しとんねん。中入り。ほら、『翠玄

武』もや」

スズが奥から呆れ顔で中に入れと促した。ちつ。マジク用のお菓子を買いくとこだったのに。広間でボードゲームに勤しんでいたシルとマジクとレイラもこちらをなんだと見上げている。『翠玄武』は「うわ、マジでレイラ様いるじゃん……」とちよつと引いた顔をしていた。

つまり『翠玄武』こと、セルキスの言う事を纏めるところだ。

王家長兄レミアハートは十年という歳月、王家の暗部『ガーデンナイト』を使いながら『四罪』と戦い続けていたらしい。そしてようやく、『四罪』を壊滅させる目処が立ってきて、その情報を全てロサリア率いる王国騎士団に渡し、国家の敵『四罪』の壊滅をロサリアの手柄とする事が目的だったようだ。

ん？ てことはあれ、俺もしかして余計な事した？ いや大丈夫だよね？ だって俺もロサリアに敵幹部を生捕りにして引き渡したから結果は一緒だよね？

「レミアハート様は『ガーデンナイト』の情報力を上回る情報網と王国騎士団並み、いやそれ以上の殲滅力を見せた『白獅子』に褒賞を出したいとの事でした。いえ、『この十年の苦労は一体なんだったんだろうな……』とか『『四罪』壊滅の為に投じた資産、いくら使ったかな……』とか遠い眼でブツブツ言っただのは私は聞いてませんよ！ もちろん私もとしても貴方方としても表立って渡すのは良く無いでしょうから私がお待ちしましたー」

なんかもはや『翠玄武』ってパシリみたいだな。この人めっちゃ頭良いんだろうにめっちゃくちや苦労してそう。……ってやべえ！ 金塊ドサドサ目の前に積み出しやがった。うっわあ。小都市一年分くらいの運営費になりそう。

「いや……多くね？」

「いえ、騎士団を敵壊滅に導入する金額に比べれば安いとレミアハー卜様はおっしゃっていました。何しろ「調子良かったからノリで54拠点潰し」といたわ。残党は残り4つの拠点に逃げ込むように誘導してあるから後は宜しく！」とか言われるのでこれくらいは当然だと。……つまりは貴方方と敵対したくはないという事かと」

あーうん。調子乗り過ぎたっかなー。最近左眼が馴染んできて調子良いからやり過ぎたな。

「というかここまでやって報告しないは無理があると思いませんか？」

「そう言われればそんな気がしてきたわ。しゃーない。今回は首置いてけはやめといてやるわ」

「ホッ……。機密ベラベラ喋ったかいがありました……」

「いやそれはそれでどうかと思うけどな」

「ついでに貴方もロサリア様を王にする協力してくれたりしません？」

「……ついでに言う事？ ていうかロサリアさん王位継承権放棄してるって聞いたけど……？」

「王家長兄、次兄、三兄の継承権上位御三方は無能ではありません。だからこそ、その御三方はロサリア様に王位をと動いておられます。今は対外的に難しい時期ですので、強き『騎士王』こそ必要である、と」

えっ。いまでもない事聞かされた気がするんだけど。後ろでレイラが「まあ、兄様方ならそうするだろうなあ」とかしみじみ言ってるからマジなんだろうなこれ。

「……つとまあ、今言った事は零分冗談なので！」

「いや本気やないかい！」

「あはは、いえ、ロサリア様のご友人でいてくれれば結構なのです。あの方も苦勞してらっしゃるのですよ。王宮内でのしがらみに」

「別にロサリアさんとはそんな事言われなくてもマブダチだし」

「ええ、それがいいのです。……と長居してしまいました。それでは私はこれで！」

「あ、ちよつと！」

嵐のように現れ嵐のように去っていったなあいつ。セルロースだっけ？　なんか大変だなあいつも。とりあえず目の前に積まれた金塊一つだけ手に取る。これ一つで一年は暮らせるんだが。

「スズ、これ孤児院に寄付。残りも適当にばら撒ける？　こんな金手元に置けないわ。……あ、欲しい人いたら適当にもらっちゃっていいけど」

金塊をヒラヒラ見せるもシルもマジクも首を横に振る。やっぱいらないよな。怪しいもんこれ。

「さすがに額が大きいからばら撒くにしても時間掛けてゆっくりになるで？」

「その辺の采配は全部任せるよ。胡散臭くて使えないよこんな金。で、スズ的にはどうだったのさつきまでの話」

「ま、『翠玄武』は信用出来ないっちゅーのは間違いないわな。言つとる事もや。うち、スキル使えばウソを見抜けるのは知つとるやろ？」

そのうちにこの前、ウソを吐いたんやからな。見抜けんかったわ。どーせ戦闘力皆無もウソやろ。多分スキルなんやろうけど」

「どこまで本当の事を言ってるか分からないって事か」

「ああ言う類は九割は本当の事話すもんや。せやから難しいわな。……もしくは全部本気で話しとるけど後で心変わりしたとか間違つた事を本当だと思い込んで話をしとるか」

「『翠玄武』まで登り詰めた女が？」

「まあ無いとは思うけど一応可能性だけ、やな。いや心変わりは割とそうやけどあいつ。どっちにしる信用出来るかつつーとやな」

「セルキスなら、少なくともレミアハート大兄様からは信用されてるぞ」

「レイラ？」

「なんせレミアハート大兄様の懐刀なんて言われてるからな」

「……もしかして強い？」

「セルキスは強いぞ。『ガーデンナイト』全員相手にしても瞬殺するくらいには。ま、基本は研究ばかりやってるから『翠玄武』らしいっちゃらしいけどな」

「ちなみにどんな研究やってるか知ってる？」

「ああ、なんか最近の水をかぶると女になって、お湯をかぶると男に戻る体質になる『娘溺泉』とかいう温泉を作るとか言ってるのかなんとか」

……どうしよう。信用出来ないけど嫌いになれないタイプだわ。

11. 王国一の宝？ 興味あるね！

王国一の大商人と自称している、いや実際三本の指に入るのだがそれはともかく大商人であるおひげが立派なルドランのおっさんが募集を掛けた。

『手に入れて欲しいものがある。報酬は王国一の宝である。腕に自信のある冒険者の働きを期待する』

なんとも曖昧な募集である。何を手に入れたら何が貰えるのか。主語って知ってる？ とにかく、こんなクソみたいな募集にオレハツラレクマーしてしまったのでおっさんの屋敷に俺たち『白獅子』はやってきた。いや気になるやん王国一の宝って。スズも「なんやろ……。情報無いけど……面白そうやな！」ってノツてくれたし。怪盗の血が騒いだっぽいな。ただルドランのおっさんは一見悪徳商人風だが、クソまっとうなおっさんなので『ルミナーレ』の出番は無く俺たちも真っ当に報酬を手に入れるべく現れたって訳。

「おい、『白獅子』じゃねえか」

「なんだよふざけんなよ」

「くそ絶対勝てねえ」

「ふん、情けないな。俺はこの後、俺用の墓の用意をしておくぜ！」

「いや直接戦う訳じゃねえ。偶然触れた壁を擦り抜けちゃうくらいの確率で勝てると踏んだね俺は！」

「確かに！ 競合したら一度も勝てた事なんてないが、勝てるか負けるかっつーなら確率は二分の一！ イケる気がしてきた！」

屋敷の大広間に通された俺たちの前に広がる人、人、人。冒険者めっちゃいるやん。チーズに群がるネズミの如くである。俺たちも一緒だけど。そんなに注目するなつて。めちやくちや言ってるけど、お前らほとんどスキルの俺よりは上なんやで？ 後半、無駄に盛

り上がってる冒険者特有のノリは嫌いじゃないけどな。

「冒険者諸君！」

少しガラついた大きな声を張り上げながら、ルドランのおつさんが執事を従え入ってきた。そういやポケモンにルドランっていたな。

「諸君らに集まってもらったのは他でも無い！　かのロスイン火山に眠るという伝説の花、ゴナベル草を採取してきてもらいたい！　ゴナベル草の花から取れるデハポンという蜜が必要なのだ！」

「ゴナベル草だと……？」

「んなもんほんとにあるのか……？」

「絵本の話だろそれ」

「トランキーロ……あっせんなよ！」

ざわつく冒険者達を尻目にこそこそと仲間相談する俺。

「……ゴナベル草って知ってる？」

「んー本当にあるかは知らんなあ。それが何になるかも知らん」

「絵本で見た。でも綺麗としか書いて無かった」

「あ、リイナ師匠がたまに取りに行っていました」

「まじ!？」

「はい、色々使い道あるみたいですけど……」

実物を知るシルがいる。勝ったわ。第一部完。

「おい、それで報酬つてのはなんなんだよ！」

「そうだそうだ！　あのロスイン火山まで行かせるんだ！　命掛ける価値あるもんなんだろうな!？」

「勿論当然です。私が嘘を付くとしても？」

「む……」

冒険者達とルドランのおっさんがごちや言ってるが、自信満々のその王国一の宝とやらはまだ教える気が無いらしい。しかし……

「たしかにロスイン火山まで行くなって面倒だよな。お金欲しいって訳でもないし」

「それはそうやな」

「……王国一の宝が何か知ればそれで良い」

「それもそうですね」

俺達は一致団結した。面倒臭いと。

「……もしどなたかが達成したら王国一の宝というものが分かるのでは？」

「さすがシル、それだ！」

「なら行く必要ないか」

「じゃあ帰ってお菓子食べる」

「よし、撤収！」

こうして俺達はルドランのおっさんと冒険者共がごちやごちややってる間にさつさと屋敷から出て自分達のギルドハウスへ帰ったのだった。

（f i n）

「……で話が終わったら楽だったんだけどなあ」

それからひと月が経ち、冒険者達は誰もロスイン火山からゴナベル草を手に入れる事は出来なかったのだった。そして俺達はすでにそ

んな募集があつた事などとうに忘れていた。……ある日、冒険者ギルドで何か面白い依頼やら募集やらないかなーと物色していた俺の所にルドランのおっさんが現れるまでは。

「何故取りにいかんのだ!？」

「おうルドランのおっさんか。え、何を？」

「ゴナベル草だゴナベル草!」

「んー、ああ、あれか。……あれ、まだ誰も達成してないの？」

「あの場におつた全員諦めたわい」

「ええ……まじかよ。じゃあ俺達もリタイアで……」

「本当にそれで良いのか？」

「何故に？」

「この冒険者ギルドの冒険者、全員が諦めたとなると冒険者ギルドの沽券に関わる事となるだろう?」

「まー確かに……。でも俺個人的にはそんなどうでも……」

どうでもいい。そう言おうとは思つたのだが。気が付いたら集まる視線、視線、視線。いつも笑顔の受付の女性ですら無表情でこちらを見ている。

「いや、依頼がクソなだけだろ。あるかも分からない草取ってこいか。ていうか無いんじゃないやね? ソレ」

「仲間が実物を見た事があると言つておつたのだろうか? それとも見たというのは嘘かな?」

ぐぬぬ。さすがルドランのおっさん抜け目がねえ。しつかり聞かれてやがる。うちのシルを嘔吐き呼ばわりは許さんぞおっさん。

「はあ、分かったよ分かりましたよ。やりやあ良いんだろやりやあ」
「流石は『白獅子』! 期待しとるぞ!」

かつかつかと笑いながらギルドを後にするおっさん。クソ、断れないように場所選んで声掛けてきやがったな。いやまあぶっちゃけ、行くのが面倒臭いだけで行けない訳じゃないんだよ別に。暑さはシルのバフがあるからどうとでもなるし。魔物を避ける分にはスズがいるし。火山が噴火しようがマジクがなんとかしそうだし。俺？俺はあれよ。……皆んなの荷物持ったりとか出来るし（震え）

しょうがないので俺たちはロスイン火山へ向かった。特に問題はなかったので割愛する。

「ところでシル」

「はい？」

「そのゴナベル草って毒とかヤバイ系の薬とかになったりしないかな？」

「いいえ、リイナ師匠は美容液の原料に使ってましたけど」

「まじ？あの人の若さの秘訣だった？……ってそれ不老不死系とかじゃないよな？」

「いえいえ、本当にただの美容液だったはずですよ？……多分」

本当だろうか。あの人は見た目が若過ぎるからな……。正直不老不死とまで行かなくても老化防止効果は本当にありそう。後ろで顎に手を当てて何か考えてるスズも多分同じ事考えてそう。

「美容液の原料になるって草が伝説になるの？」

「ふふ、マジクちゃん。ゴナベル草の問題はね、生息条件が厳し過ぎて生息域を広げられないんだよ」

「へえ、シル詳しいね！」

「リイナ師匠が植物や生物に詳しいから……」

まあそんな会話をしながら、シルのお陰でゴナベル草ゲットは特に問題は起こる事もなく。本当に遠出がちよつと面倒だっただけである。ちなみに地面から抜くと一日待たずに枯れるという話だったの

で鉢植えに周囲の土ごと入れて持って帰ってきた。そりやあ知らなかったら、もし見つけていても持って帰るの無理だね。

「おおー。流石は『白獅子』！」

ルドランの屋敷にゴナベル草をおっさんに渡した。おっさんは大層喜んでくれた。奥さんに贈るらしい。いやいやいや……まあ冒険者なんで理由とかはどうでもいいけど。

「んで？ その王国一の宝つてのは？」

「おおー！ ……ルーラン！ ルーランはいるか！」

「はい、お父様」

そう呼ばれてきたのは王国一の美姫と噂のルーラン嬢だ。本物の箱入り娘でその姿も滅多に見る事はない。噂に違わぬ美貌ではある。なんかそれらしい物を持つてる風ではないけど……まさかね。いやそんなはずは……。

「では『白獅子』……いやレオ殿には私の娘と結婚する権利をやろう！」

「『は？』」

「あの……宜しくお願いします」

いや宜しくじゃないが??? 何も宜しくないが??? いや流石にルドランのおっさんが娘を景品にする程外道な事する訳……いや、もしかしてむしろ逆か? ……嵌められた?

「あー、権利いらないんで現金くれ」

「そんな……!? ひ、ひどい」

「なんとワシの娘をいらんと申すか!？」

「お前、うちのパーティーメンバーの顔見てもう一回言ってみ？」

ひどくないし。いきなり婚姻押し付けられそうな事のほうがよっぽどひどいし。うちのパーティーメンバー全員がゴミを見る目でルドランの事を見つめているの分かれや。

「お前、ルーラン嬢になんか言われて俺を嵌めただろ」

「……そんな事はないぞ？」

「普段優秀なくせに分かりやすいなあおい。本当はこんなんで娘を嫁に出したくないんだろ」

「……いや本当に早く嫁に出したいんじやが、よりにもよってお前さんに一目惚れしてしまつてな。『白獅子』は無理じやつて何度も言つたんじやが聞かなくてのう……」

「私じゃ不満ですか『白獅子』様！ お父様は後でしばきます！」

「悪いね。見た目だけ磨いてるような女に興味ないんだルーラン嬢。報酬、上乘せして送ってくれよルドランのおっさん」

後日、俺達のギルドハウスに巨大純金製ルドラン像とかいうマジでいらぬ物が送られてきた。ルドラン曰く、「最近王国内で純金の流通が多く平時より安かつたので買い占めた。純金なら放っておけば価値は上がるから良い投資」との事。どうせなら飾りたいから己の像を作つたらしい。

いやその純金流通させたの俺達やないかい！ 巡り巡つて変な像になつて帰つてくんや！

12. 金のルドラン像（二体目）

悲報。金のルドラン像、二体目が送られてくる。

嫌がらせか？　うちの広間に二体も光り輝くおっさんの像があるんだが？　照明に反射して眩しいんだが？　あ、シルがカーテン被せてくれたわありがとう。

ルドランのおっさん曰く、「娘のルーランが君から言われた事に奮起したようだ。わしから借金して「私が見た目を磨いてるだけの女じゃない」事を見せてあげるわ！　なんならレオを買い取ってやるんだから！」といって商売を始めたらしい。

それがどうにも商才があるらしく、店を始めてすぐに三ヶ月くらいで借りた分を返せる目処がついたらしい。「わしの王国一の商人って肩書きも娘に奪われる日がいつか来るかも知れんわい。いやまだまだわしも負けんがな！」と、あの後本当に娘にボコボコにされたらしいおっさんはアザやたらんこぶだらけの顔で豪快に笑っていた。いやおっさん王国一は自称やんけ。

んで引きこもり娘の件の感謝として二体目が送られてきた。いらん。スズ、これ処分……え、これ以上純金大量に流通させると純金の価値がぶつ壊れるからしばらく無理？　ま？

「これは趣味がとても悪いですねレオさん」

像を見て、像の出っ張った腹を撫でながら聖女クルスさんは苦笑いである。それはそう。

「そう？　俺もそう思うわ。今日は、というか今日もというか、最近わりとウチのギルドハウスにいる気がするなクルスさん」

「まあ、それはレオさんのせいでもあるんですけどね」

「俺？」

『『四罪』の壊滅、大層なご活躍だったそうじゃないですか」

「ああ、別に俺たちの名前出さなくて良いって言ったのに王国騎士団

と『白獅子』が協力してってロサリアさんが発表しちゃったんだよな。真面目だよなあの人ほんと」

「ええ、それで最近教団側で問題になってるの分かります?」

「何が?」

『黄龍』、『蒼麒麟』、『翠玄武』は王国側の人間、更に『白獅子』までも王国側ではとか言ってるんですよウチの上の方々は」

「何も国内でやーやーやる訳でもあるまいし」

「違いますよレオさん。そのレオさんの言うやーやーをやらない為にバランスが大切なんです」

「……きな臭いの?」

「まあ、その為にロサリアが神殿騎士団に力の違いを見せつけましたから。勝ち目が無いと分かっているうちは起こらないでしょうけど、不満の溜まり方はひどいみたいです。少しガス抜きが必要なんですよウチも。というわけで協力してくれませんか?」

「ええ……」

つまりは俺たち『白獅子』はロサリアさんともクルスさんとも友好な関係ですよアピールが必要なのだという。まあ別に神殿騎士団の人らも信仰が深く生真面目って感じで悪い人達じゃないし、無駄に血が流れるのは俺だって避けては欲しいし。でもだ。

「クルスさん、俺たちが王都でクルスさんの、年に一度のサン・ブリジビフォア祭で聖女の護衛役を務めるって神殿騎士団の人達大役を取られたとか言って怒ったりしない?」

「まさか。『白獅子』の勇名、少しは自覚したほうが良いですよ? 『黄龍』と並び剣を振るう者の憧れなんです。王前でロサリアと引き分けた貴方の事を、ロサリアにボコボコにされた神殿騎士団が反対出来る訳ないじゃないですか」

笑顔で辛辣な事言ってる聖女ウケる。

「ていうか素だと俺より強いクルスさんに護衛なんてひでぶ」

話してる最中に目の前から消えたクルスさん、と同時にゴリラに殴られたような衝撃が後頭部に加わり、「今のはレオが悪いな」とか「レオさん……」とかなんか後ろから聞こえたような気がしながら意識を手放したのだった。

ハッ！ と目を覚ましたら馬車でコロコロと輸送されてる最中であった。ん？ これは……シルの膝枕である。よし、もう一回寝よ……

「駄目ですよ？」

殺気!? いやクルスさんか。殺気で合ってたわ。教団の馬車で俺たち『白獅子』と『朱天狐』クルスさん、ついでに『蒼麒麟』レイラも俺たちの住む都市タオから王都ブリジビフォアに輸送中と。

「あれ、俺なんで眠ってたんだっけ？」

「眠かったのでは？」

「うーん……まあ寝てたからそうか」

深く考えるのは辞めよう。考えると後頭部が何故か痛い。

王都ブリジビフォアにて年に一度開かれる、サン・ブリジビフォア祭。我らのホスグルブ王国最大のお祭りである。全国から集まる人、人の群れ。その人々の目的はクルスさん、いや聖女の奇跡である。俺はいつもの旅人の服にその辺の剣……ではなく、教団が用意していた（とかいう絶対クルスさんが用意した）なんか凄い装飾の白銀の

鎧に、獅子の立髪を見立てたすごいモコモコ（白いファー）が付いた裏地の赤い純白マントを付け、儀式用のこれまた装飾が凄すぎて絶対実戦向きじゃない剣を持たされた。

ロサリアさんに会った時に「やあ、似合ってるじゃ……ないか」と微妙な反応されたけど、絶対似合ってるじゃないんだろうなコレ。「裏地が朱……」とかなんとか小さな声で言ってたから「いやこれクルスさんが勝手に用意して着せられちゃって」って返したら「あ、ああ……そうなのか」って動揺してたけど泣いちゃうぞ俺。

13. サン・ブリジビフォア祭①

『白獅子』の面子は王都に入った段階でレオと離れていた。魔族混じりのマジクは人混みを怖がる為、王都ではスズが自身出身の孤児院に連れて行くのでシルもそれに着いていった。レオには「儀式は遠くから見てますので」と言っている。

『蒼麒麟』レイラもレオと二人でクルスの護衛役を務める事になっているので教団と王家、そして国の力の象徴たる『五龍』最強の一格『白獅子』の友好を全国民にアピールする場となる。

祭りが始まり、祭りのメインイベントである聖女の舞の時間に近付いた。複数の鐘の音が、王都に鳴り響く。ゆっくりと開かれた王都の正門から正装を身に纏った『聖女』である『朱天狐』クルスと、その後ろから純白の鎧と表地が白色、裏地が朱色のマントを身に付けた『白獅子』レオ、拳闘士スタイルに蒼のマントを身に付けた『蒼麒麟』レイラの二人が現れ、メインストリート直線にメイン広場まで敷かれている赤絨毯を歩き出した。

白。穢れなき神聖な色。物体が全ての波長を一樣に反射する最も明るい色。祭りを大地が祝い、祝福を注ぐような眩い日光が照らし出す純白の鎧とマントを身に付けた『白獅子』は、今回の主役である聖女に劣らない注目を集めた。

「あのマント……裏地が朱色？」

「え、ウソほんと？」

「お似合いじゃん」

「おいおいマジかよ大ニュースじゃん」

一部の人間が『白獅子』の装いを見て、少し騒ぎ出す。その様子を見かねた人混みを避け建物の屋上からマジクとスズの二人が眺めていた。

「あつ、クルスさん今こっさり笑った」

「やってやった！　とか思うとるんやろうなあ」

「スズ、あのマントどういう意味がある？」

「貴族ってな、家それぞれに家色つてのがあるんや。で、婚姻の際に纏うマントは男側の貴族の家色が表地、女側の家色が裏地のマントを身に付けるつちゅうのが決まりであってな」

「でもレオ貴族じゃないよ？」

「貴族の家色にも例外はあってな。『五龍』それぞれの色は、例えば王家であつても更に優先する色とされるんや。だからレイラ様も今『蒼』のマントを付けとるし、普段ロサリア様が『黄』のマントを付けとるのもそういう事や」

「ふーん。……あつ」

「そつ。全国民が王都に祭りを見に来とるこのタイミングで「レオと私は特別な仲です」アピールをしとる訳やな。この祭りを取り仕切つとるのは教団やし教団も折り込み済みつて訳やろうなあ。知らんのレオっただけやろアレ」

「へー」

「でもレオっちもマジクと同じく「俺貴族じゃないし」くらいに思うとるんやろうなあ。で？ マジクはええんか？ レオっち取られるかも知れんで？」

「だってレオにクルスさんどう思つてるか聞いた事あるし」

「……なんて言うてたん？」

「すげえ可愛いゴリラ」

「……あれでも可愛いとは思つとるんやなあ。不敬不敬つと。まあ、クルス様なら笑いながらレオっちをブツ飛ばすか」

クルス様、気安い関係を求めとるもんなとスズは遠くから眺めながら呟いた。マジクもスズが買ってきてくれた出店の食べ物やハムハムと食べながら一緒に見ている。

「シルは？」

「シルならもうちよい近くで見てくる言うつたで」

しかし。やっぱレオは表の、それも国の顔になる人間なんよな。うち、一緒におるんやっぱまずいよなあ……と、スズがいつもの思考に入るのは平常運転である。

「そういやクルス様、「教団のガス抜きに協力しろ」とか言つとったな」「それであのマントなんですよ？」

「それもあるけど……多分、貴族側と教団側の戦争の代わりを用意したんやな」

「代わり？」

「ん。ようはレオっち争奪戦、やな」

レオっちそういうのほんま興味ないからな。興味ないから良いつてのもあるんやろうけど、あんまり過ぎるとこちらも怒るからなと、スズはクルスにシラけた目線を送っていた。

「やっぱ人多いな」

「だな。この日は国中が楽しみにしている日だからな」

「聖女の奇跡、ねえ」

「なんだ見た事無いのか？」

「祭りのつて事？ あるよ」

「祭り以外もあるつて事か？」

「そりゃあ首が千切れても即座にくっ付くなんて奇跡だろうさ」

「違うわい」

ゆつくりと広場に向けて前を歩くクルスの歩調に合わせながら、目立たぬよう小声でレオとレイラは会話していた。本来、会話をする場などではない。レオを人選したほうが悪い。レイラも、こういうの悪くて良いなと思っている上、表舞台で『白獅子』や『蒼麒麟』を注意出来る人間がいない。

「二人共、お静かに」

「はーい」

聖女を除いては。そんな三人を近くで見ようと人混みの中に紛れたシルも見ていた。

「レオ、本物の王子様みたい……」

割と本物の王子様であるロサリアを眼にする機会もあるシルだが、レオに関しては目が曇っているのでもそんな感想になるのも仕方ない。

「クルス様ともレイラ様とも、お似合い……私……」

「失礼、『白獅子』の付与魔導師だな？」

「え？」

聖女が大広場に設置された舞台に上がる。舞台両袖に控えるのは『五龍』の二格。歓声が上がる。皆一様に聖女を讃える。

（うん、クルスはレオと出会って本当に楽しそうだ。やり過ぎなところはあるけど。俺やロサリア兄様と居る時以外にもようやく自分の居場所が出来たって感じだな。ずっと使命に押し潰されそうだったもんな……。流石は俺の旦那だ）

舞台中央に立つクルスを見ながら、レイラは昔を思い出していた。出会った頃は作られた笑顔しか浮かべる事が出来なかったクルス。そんなクルスを笑顔にしようと頑張っていたロサリア。色々無茶やって怒られたんだよなとか考えながら、頑張り過ぎて兄妹みたいになっちやって男として見られていない兄が少し可哀想になった。

（ロサリア兄様とクルスなら立場的にもまったく問題無いんだけどなあ。ロサリア兄様が政治を自分から出来るだけ遠ざけた結果、政略結婚の線は無くなってるし。王族なのにロマンチストなんだよな兄様は。人の事言えないけど）

王位継承権の序列が低かった為、自由に育てられたロサリアやレイラ。そのロサリアはレイラから見てロマンチストと言える思考に育ったにも関わらず、序列の高い現実主義に育った長兄から三男までがロサリアを王へと押す皮肉。

（結局どうするのが一番なんだろうなあ。幼なじみの騎士王と聖女つてなれば美談の作りようなんていくらでもあるだろうし、兄様方も考えてそうだけどロサリア兄様が本人の意思を無視するのは許さないだろうし）

（……無血革命つて形でレオを頭に据えちゃうのも有り、かな？ 野心ゼロだし……どことも仲良いし……国の運営丸投げしそうだから国の仕組みの変化は無さそうだし……『千年に一度の厄災』から国を救う偉業を達成して『白獅子』を与えられた英雄で国民人気抜群だし……。私がレオの子でも産んじやえば王族の血は繋がるか……それなら革命じゃなくても良いのでは？ で、したらロサリア兄様も本当に自由になれるし……クルスもレオ以外にちゃんと目を向けられる……？）

（……ありなのでは？）

とんでもない事を考え出したレイラが、反対側の舞台袖に立つレオに視線をやる。レオに声を送る女性や子供達が多い。一切興味無さそう、なんなら聖女の舞にも興味無さそうで今日の夕飯しか考えてなさそうな顔でレオは立っている。

（『白獅子』パーティー全員レオの嫁にしちゃって、んで俺が対外的に

正妻って事にすれば後は別にこだわらないし……)

(……レミアアハート兄様にそれとなく言ってみるか。いや、レオが面倒臭がる壁がデカいか)

基本表舞台に興味無いし『白獅子』の授与も無理矢理だったみたいだしなとレイラは舞台そっちのけで思考を巡らせていた。なお、レオも夕飯の事しか考えていないので舞台の事なんて考えていなかった。

(お二人共、こっちの事なんて考えてないみたいですね)

そんな二人を舞台中央から見やり、思わず笑みが溢れた。今日付いてくれた二人はクルスにとって自然体で居られる数少ない人間なのだから。

(少しはあのマントで動揺してくれるかと思ったのですが、まったく動じないのは傷付きますよ? ……といけないいけない)

余計な思考をクルスが止めた。手に持つ儀杖を天にかざす。会場が、いや国が静まり返った。場にいる全員が、聖女を見ている。

静かに。ゆっくりと聖女が踊り出す。昼間であるにも関わらず、はつきりと分かる優しい光が天から聖女に降り注ぐ。スキルでもない。魔法でもない。ただ国の平和を祈る聖女へ、天から祝福の光が舞い降りるのだ。

そんな奇跡を目の当たりにした全員がいつの間にか跪き、聖女へ祈るのだ。

『神の加護のあらんことを』

14. サン・ブリジビフォア祭②

「やあ、スズにマジク。元気そうで何よりだね」

「あれ、ロサリア様だー」

「ほんまやロサリア様、なんでこんなところに？」

「君達の姿が見えたからね。挨拶をしに来ただけさ」

「ロサリア様、聖女の舞、近くで見ないのー？」

「ま、まあちよつと考える事が多くてね」

「（ふむ……やっぱロサリア様もこれからレオっち争奪戦が始まるって踏んどるっちゅう事かいな）……ロサリア様はどう思っとるん？」

「え、いや、そうだな……。参ったな……。あのマントを見て動揺した事を一目で見抜かれてしまった）やはり少し考えてしまうよ」

「（考えてしまう、か。王族側の動き、ロサリア様なら分かりそうやしな）で、ロサリア様はどうするん？」

「私か？（やはりスズには私の動揺は見透かされている。その上でクルスに私がどうする、か）……そうだな。正直少し悩んでいるかな」

「（悩む？ 派閥の問題やろうか？）ロサリア様が動かんと事が大きくなりそうやけどなあ」

「（な!? それはこのまま婚姻を結んでしまうという事か!? いやしかし、クルスが幸せならそれでも……）最悪、動くとき色々壊れてしまいかも知れないからね……」

「（貴族側と教会側の関係、そこまで悪化しとるんか。いやでも……）なんかロサリア様らしくないなあ」

「そうかな？」

「ロサリア様ならいつでも道は自分で切り開いているんちゃうん？」

「壊れてしまうんじゃない、別の道もロサリア様ならイける思うけどな！」

「……そうか、確かにそうだな。私らしくないか」

「そうそう、いっそロサリア様がもうガツーンと纏めて頂いちゃっても……つとそれは流石に言い過ぎたわ（あかんあかん、王位継承権放棄しとる人に言うこっちゃないな）」

「そ、そうだな（流石に私はクルス一筋で男色の気は無いから二人纏めては……）」

「ま、うちはロサリア様応援しとるで！（この人なら上手く纏めてくれそうやしな！）」

「ありがとう。心強いな（そんなに私とクルスの仲を案じてくれるのか。ありがとうスズ）」

二人の熱い握手を横から眺めていたマジクはなんか噛み合ってるようで噛み合っていないようなとは思っていたが、綺麗に話が纏ったみたいなので余計な事を口にするのはやめた。

尚、この後ロサリアはクルスに会いに行ったが、クルスからレオの話ばかりをまた聞かされるのだった。

「やつほークルス」

「レイラさん、先ほどはありがとうございました」

「いやいや、後ろから付いていつて立ってただけだしね。旦那は？」

「レオさんならさっさと鎧とマントを脱いで行っちゃいました。あげますって言ったんですけどね（まあきちんと保管しておきますけど）」
「（マントも返却したって事はやつぱりレオはクルスに興味無いんだな。て事はレオを王位につてもやつぱり良さげ……？）へー、どこ行っただの？」

「少し急いでいたように見えましたけど……」

「まあ旦那の事だから……花摘みかな」

「ふふつ、そうかも知れませんか」

「そういうやなんかロサリア兄様の姿がチラつと見えただけど？」

（なんとも言えない微妙な顔をしてたけど）」

「ロサリアは舞の後はいつも顔を出してくれますからね」

（多分また旦那の事ばかりクルスが喋ったんだろうなあ。）

「ふふ、嬉しい限りですね（あの感じならレオさんとの仲をロサリアに取り持って貰えれば良い気がしますし）」

「そっか。クルスが嬉しいならロサリア兄様も嬉しいと思うよ（あれ？ 思ってたよりロサリア兄様脈有りそう？）」

「そうだと良いですね」

「（……これ以外とイケるのでは？）何かあったら俺も協力するからさ！」

「まあ、それは頼もしいですね！（お二人の協力が得られるならなんと頼もしい事でしょう！）」

「……じゃあ俺の時も協力して貰えるか？（もしレオに王位をつて考えるなら、クルスが教会側を纏めてくれれば事は結構すんなり運びそうだし）」

「勿論です！（旦那旦那とレオさんの事を読んでいましたけど、ただ呼び方がそれってだけだったんですね。ええ、勿論レイラさんに良い人が見つかった時は協力しますよ！）」

二人は笑顔で握手をした。この二人も主語が足りていない事に気が付いていなかったのである。

聖女の舞が終わり日が傾き始めた頃、スズとマジクの二人はまだ広場が見える屋上にいた。

「スズ、いいの？」

「レオっちから待ってろって言われたからウチらは待機やな」

「うん……」

「は〜い♪ 『白獅子』のお二人さん♪」

『翠玄武』セルキスやん、なんか用か？ 今忙しいんやけど」

「つれないわね。お二人にとっておきの情報を持ってきたんだけど？」

「シルが攫われたとか？」

「……気付いていたの？」

「シルがレオ達近くで一目見たらウチらに合流する言うてたのに遅いからな、ウチの『鷹の目』で聖女の舞の最中に国中を探して見たけど地上には映らんかった」

「へえ、じゃあ相手は……」

『『四罪』の残党、やろ。最近また少し集まっとるみたいやしな。こない早く動くとは思わんかったけど。やっぱ数が多すぎて掃討は難しいわな」

「場所……」

「鳳凰通りにある酒場『英林亭』の地下に一つ、永亀通りにある武器屋『遠来』の二階に一つ、七五地区八通り三十番区の一画に一つ、最近あいつらが作つとる巣があるな。まあ間違いない『英林亭』の地下やろな。シルを拉致した後に隠すなら」

（私達が持つている情報より多い!?!）

「ウチらがここにおるのは、ほら、ここなら鳳凰通りが遠くに見えるやろ。レオにここで待機って言われとるからな」

「（偶然、シルさんの事が私達の情報網に引っ掛かったからスズさんの所に来てみたけど……まさかここまでとはね……）『白獅子』一人で行かせて良いの？　シルさんの付与魔導無しなのよ?」

「なあ」

「……何よ」

「レオっち舐めすぎやろ。ソロでどんだけ冒険者やとつたと思う？　そら、ロサリア様やらクルス様やらレイラ様やら上の上、人間辞めてるような上澄みばつかと比べたらアレやけど」

「レオはね、その辺の騎士や冒険者くらいに負けない。レオは戦いが上手いもん。街中なら特に」

「ウチらと一緒にいる時は脳筋になるけどな。ていうかな、スキルほぼ無しでロサリア様と渡り合える人間、レオっち以外あんた知つとる?」

「ちわー三河屋でーす」

「ほう、どうしてここが分かぐはあ」

「てめえ、一人じゃ何も出来ないって話じゃがああ」

英林亭の扉の前にいた二人の門番。レオが声を掛け、振り向いた瞬間出会い頭に股間を蹴り上げて一人を潰した。踞った相方に目をやったもう一人のほうへ、股間を潰した男を蹴り飛ばし、受け止めた所で二人纏めて剣で突き刺した。

乱暴に扉を蹴破ったレオのほうへ酒場にいた賊崩れ八名が振り返る。入り口横に居た男は蹴破れた事に驚いたと同時に太腿を刺され、痛みに屈んだ所で首を落とされた。

『大切断！』

一番先に我に返った賊崩れが戦士系上級スキルでレオに斬り掛かる。

『パリイ』

「はあ!? 『パリイ』なんで何故防げ」

『大切断』による上段からの斬撃を弾いた反動を使いそのまま喉元を斬った。

「てめえ!!!」

ようやく我に返った他の賊崩れも一斉に襲い掛かる。バックステップでレオがわざと背を壁に付けた。剣を持ち、正面からなら多くても同時に掛かれるのは三人だけ。

『大切断！』

『豪突！』

『水面斬り！』

三人が三様の戦士系スキルで斬り掛かる。全てレオがどれだけ手を伸ばしても手に入らなかったものだ。

『パリイ』

一振りで全て弾いた。一様に振り被るような姿勢を取らされた賊崩れ達の、ガラ空きの胴に向けて思いつきり切れ味の鈍い剣で薙いだ。血飛沫を被りながら、残りの三人を見やる。窓側の一人はそこそこ強そう。カウンター側の二人はそうでもない。パッと見で実力に

当たりを付けたレオは目の前の三人の横を擦り抜け、窓側の一人に向けて机を蹴り飛ばした。

蹴破された机をスキルを使わずに窓側の賊崩れが剣を抜き切り裂いた、と同時にカウンター側にいた二人は纏めてレオに串刺しにされた。

「後一人……」

「くそ！ 誰だ『白獅子』は仲間無しじゃ何も出来ない雑魚だと吹いた奴は！ 『豪雷……!?!?』」

剣を振り被り聖剣技下級スキルを放とうとした賊崩れに向けレオが酒場に来る前に拾った小石を指で弾き、片目を潰した。食事中であつたろうカウンターにあつたフォークとナイフを手に取り更に投げる。無事であつたもう片目にフォークが、左手小指にナイフが刺さり剣の握りが緩む。瞬間、レオの全体重を乗せた刺突が賊崩れの体を貫いた。

「スキルに頼り過ぎなんだよお前ら。しかも聖騎士スキル持ちまでか」

剣も投擲も、スキルを使った威力や速さにレオのそれらは及ばない。だが、結局こちらが当たらなければ良い。スキルが無くても結局斬れば良い。スキルが無くても結局刺す事が出来れば良い。冒険者時代、スキルを使えなかつたが故に形に嵌まらなかつた騎士道などとは程遠いレオの戦い方だつた。

「……あつちかな」

カウンター奥の扉を開き、地下階段を駆け降りる。なんだと地下から階段を見上げに来た賊の顔面に壁に備え付けられた蠟燭を取りながら飛び蹴り。仰向けに倒れた賊崩れの顔面に膝から着地して顔面を潰した。

（シルは……奥の扉の部屋に一人）

魔力が見える目に今一番感謝した。シルの状況はスズの予測通りだつた。すぐにここに来て良かった。人を集めている最中だつたのだろう、まだ何もされていない。奥の扉の前、この広間にあと三人。

『白獅子』……!! あ!?!』

飛びながら手に取っていた蠟燭を、レオが宙に軽く放り投げた。一瞬、蠟燭に気取られた真横にいた男の両足首を切り飛ばした。あと二人。

「おい、人質がどうなっても!？」

ブラフ。シルしかないのは分かっているので無駄。扉に向かって伸ばした腕をそのまま斬った。左から攻撃魔導の発動の予兆の魔力が目端に入った。壁際にあった小さな机を賊崩れ魔導師の顔面に投げつけ魔導の発動を止め、机越しにそのまま剣で突き刺した。

「シル! シル!」

扉をまた蹴破り、手足を縄で拘束され、口を布で塞がれたシルを見たレオはすぐさま拘束を解き口布を剥ぎ取った。

「大丈夫か!？」

「ごめんなさい、ごめんなさい私、私、迷惑、掛けちゃって」

「いいから、大丈夫だから。遅くなってごめんな」

泣きじゃくるシルを落ち着くまでレオは抱きしめた。

ようやく、泣きやんだシルを離れたレオは返り血がシルに付いてしまった事を平謝りし、いつものレオに戻っていた。

「そろそろええかな。マジク、行こか」

「うん」

「貴女達、どこへ?」

「そんなん決まっとるやんなあマジク」

「うん、家族が帰ってきたら「おかえり!」だよ!」

15. サン・ブリジビフォア祭③

クルスとの会話を終えたレイラが、久しぶりに王城へ帰った。その脚のまま、長兄レミアハートのいる執務室へ向かい祭の最中に考えた自分の意見を話した。

「だからレオを一回上に置いちゃえば良いと思うの！　どうです……だ！」

「……はあ」

「そんなに大きなため息付きますかレミアハート兄様」

「久しぶりに顔を見せたと思ったら……レイラ、次期王はロサリアが既定路線だ」

「それは分かっているけどさ」

「……まあ代案の代案の代案の代案くらいには考えても良い案ではある。かなり詰めが甘い」

「つまり……状況次第で採用って事！」

「他の王位継承権を持つ兄弟は納得しないだろうがな。自分こそ主張する者だっているのは分かっているだろう」

「それこそ……あの兄達は状況次第で『寿命』か『病死』になっちゃうんでしょ。それくらいわた……俺だって分かる」

「レイラ、口調が統一出来ていないぞ。その俺口調、向いてないみたいだから辞めたらどうだ？　どうせクルスらの前だと保ててないのだから」

「ぐぬぬ……」

「確かにアレらは母が違うとは言え血を分けた弟達だ。が、私利私欲が強過ぎる。王位は預けられん」

「どんな理由でもロサリア兄様はそれを許さないと思うけど」

「……政治は私の仕事だよ。恨まれるのもね」

「難儀だねーレミアハート兄様は」

「そう言うなら王城で私の仕事を手伝えレイラ」

「無理無理、俺『蒼麒麟』。脳筋女拳闘士。政治分らない。だから城から離れる。……てな訳で私はこれでー！」

「待てレイラ！ ……まったく」

スタコラサツサーとレオが呟いていた謎の言葉を発しながらレイラはレミアハートの静止も聞かず退室した。と同時に柱の影から『翠玄武』セルキスが顔を出した。

「レイラ様は相変わらずですね」

「そうだな、と帰ったかセルキス。『白獅子』はどうだった」

『翠玄武』セルキスは無言で両手を上げた。

「恩を売るところか、実力差を見せつけられた感じですね。絶対敵に回したくないです。『白獅子』が潰した『四罪』残党の拠点の一つ、英林亭の後掃除は命じてきましたよ。もうちょっと残党が集まるのを待ってたんですが、集まる前に事を起こされたら仕方ないですね」

「そうか」

『白獅子』怒らせちや駄目、私は心に誓います。敵認定されたら話なんて聞いて貰えなくなりますよ。アレは敵に殺意が高すぎる。あ、コレ見ます？ 英林亭に偶然仕掛けていた私の研究室試作品、映像記憶水晶の映像。冒険者でいうと上位に位置付けされそうな連中が虐殺される映像ですよ。ああいった場所での荒事慣れすぎでしょ。戦う場所選ばなければ騎士団にも勝つんじゃないですか？」

「確認しておこう」

「懐に入れば身内にはゲキ甘なんでしょうけどねー。明確な敵に対して一切容赦が無い。元は冒険者としても実力が無かったところから這い上がっただけがありますね。元々強者であるロサリア様なんかとは真逆の性質というか」

「ロサリアも敵に一切の容赦は無いよ。ただ話を聞く余裕があるか無いかだろうさ」

「そうですかねえ」

「一つ聞きたいのだが」

「なんででしょう」

『『白獅子』は付与魔導師がいないと弱い。仲間がいないと無能』という噂が裏で流れているようだな」

「それは大変ですねえ。ま、仲間の有能さを認められたいらしい『白獅子』としては別に良いのではないですか？」

「……敵対したくはないんだな？」

「敵として認識されたくないですねー。では私はそろそろアレの研究に戻りたいのですがー」

「……分かった。下がれ」

「はーい」

「……まったく。どうしたものかな」

王都ブリジビフォアを照らしていた夕陽が沈んだ。宿で血を流して着替えたレオとシルに、スズとマジクが合流し全員でシルを慰めながら出店を回る事になった。

「ほらシル、箸巻きだぞー」

「シル、わたあめ美味しいよー？」

「シル、リング飴あっちにあるで」

「ううん、そんなに食べられないから」

「ほらほらー好きなもん食うとええでー。レオっちの奢りや」

「じゃ、じゃあリング飴一つ……」

「よーしじゃああの特大リングボーリング五重の塔飴を買ってやろう！」

「無理無理無理、無理です！」

「ねえスズ、レインボーリングってあの神聖樹の？」

「着色しとるだけやろ。ほんまもんはマジクのお爺さんが守つとるんやから取れる人間なんておらんよ。マジクは食べた事あるん？」

「うん、一つだけ。美味しくなかったよ。スズも食べたい？」

「美味しくないならいらんかなあ。ウチ、美味しいリングのほうがえ

えわ」

「私も！」

出店を覗きながら、ゆつくりと練り歩く。周りの喧騒もこの日ばかりは気持ちが良い。マジクですらフードは深く被りながらも楽しそうである。

「あら、レインボーリングゴって美味しくないんですね」

「あの教団本部の大神殿の壁画に描かれてる神聖樹って実在するのか。やっぱ世の中広いな」

「あれ、クルス様とレイラ様やん。なんでこんなところるん？」

「ほんとだー、こんばんはー！」

「はいこんばんは、マジクさん」

「はいシル、ダブルゲーミング特大レインボーリング五重の塔飴レボリューション！アレ二人共何してんの？」

「えええなんでこれ光ってるですかあ……ってクルス様にレイラさん、お二人も祭を楽しんでるんですね」

「そ、たまには城以外からでも花火見たいじゃない？」

「私も教会に籠るのはあまり性に合わないと言いますか」

「おや、皆んなここに居たのか」

「あれ、ロサリアさんまで。皆んな物好きだね。城も教会も、花火眺めるには特等席だと思うけどねえ」

「お？　なら王城に来るか」

「いえいえ、教会でも良いと思いますよ」

「ちょ」

レオの両腕にクルスとレイラが抱き付いた。「『はっ？』『シル、スズ、マジクの三人の冷たい目線からレオは「いや、知らんし。俺なんもしてないし」と目を逸らした。』」

「よし俺と一緒に王城へ（あれ、クルス協力してくれるんだよね？）」

「いえいえ私と共に教会へ行きましょう（レイラさん、協力してくれるんですよね？）」

両腕を綱引きのように引かれてギリギリギリと人体から発してはいけない音がレオから上がった。当の本人は全てを諦めた顔をしている。レイラもクルスも、共にレオを余裕で超えるゴリラ筋力の持ち主である。掴まれている時点でレオにはどうしようもないのだ。

（協力する為の前振りですよ？　ですよ？　そろそろ大丈夫ですよレイラさん？）

（おおおお、やべえクルスの馬鹿力また強くなってるじゃんか!? 鍛えてないのになんで筋力上がってるんだよ!?)

「（こんな所でレオっち争奪戦の前哨戦が始まってもうたか……）ほら、ロサリア様止めてーや」

「（スズ、やはり私の背中を押してくれるのだな）わ、分かった。二人ともその辺りに」

「ロサリア（兄様）はどっちの味方なんですか!」

「……とりあえず今は二人の間でグツタリしているレオの味方かな。

二人共落ち着いて」

「大丈夫です！　腕が千切れても繋がりますから!」

「嫌だ！　昼間に奇跡の舞披露していた奴の台詞じゃないよねそれ!?!」

「レオさん、どうせご飯の事しか考えてなくて見てなかったじゃないですか!」

「ハハっ、ばれてーら」

「見いやマジク、花火上がり出したでー。綺麗やなー」

「もうすぐ目の前で汚い花火が上がりそうですけど……」

「シルー、スズー、マジクー、助けてー」

「シル、いまはロサリア様に任せとき」

「そ、そうですね」

「おー花火綺麗」

「ぎゃあああああ」

王都の夜空に打ち上がる花火が今年のサン・ブリジビフォア祭の終演を告げる。シル、スズ、マジクの目の前でも汚い花火が弾けたとか弾けなかったとか。

16. 俺、『白獅子』辞めます

「俺、『白獅子』辞めます」

我がギルドハウスにて他のパーティーメンバーに堂々と宣言した俺。を見る目の前の三人にため息を吐かれた。なして。

「俺、『白獅子』辞めます」

とりあえずもう一度言ってみる。

「レオさん……。『白獅子』は称号であって職業じゃないから辞めるも何も無いって何度も言われたじゃないですか。王城にいらないうって最初に言い出して乗り込んだ時……」

「ぐぬぬ……。無理矢理押し付けられて何の旨味もない……」

『白獅子』授与の時に獅子騎士団の創設を拒否、近衛騎士団長待遇での招聘も拒否、神殿騎士団特別待遇での招聘も拒否。何もかも断つてたらそら旨味なんか無いわな。あるとすれば王国内の色んな設備顔パスで行けるってところやろうけど」

「一切使ってないから意味がない」

「……せやんなあ」

「いらないうってあんだけ言ったのに……」

「断れなかったもんねー」

「しゃーないやん。ほんま偶然『千年に一度の厄災』が現れて討伐したのめっちゃ大勢に見られたんやから」

我が家でいつも通り寛いでたら、スズが急に「なんか嫌な予感がある」とか言い出して、皆不安そうだったから都市の外に出てスズが言った方向に歩いて行ったら、なんか召喚されたみたいに急に出現したアレ。ゴジラかと思ったわ。君世界観間違ってる？ ってマジで思ったもん。いや異世界で巨大モンスターは全然間違ってるだけだ。

「ま、やらないと沢山人死んでたし」

「千年単位で現れて王国を滅ぼしていた伝説の魔物の初討伐でしたからね。千年王国と揶揄されていたこの国が永世国家と言われ出したんですから。レオさん凄いです」

「いやあれ完全にシルの付与魔導が凄かったただけだからね？ スズが地の利を活かす戦術立ててマジクが足止め頑張ってくれたからだからね？」

「うち、あの辺が広くて戦い易いって言っただけやからな？ 城よりデカイ魔物相手に一人で前衛張って倒したやつがようゆうわ」

「王都を吹き飛ばす威力のブレスを身体一つで受け止めるのは付与があるないの問題を超えますよ……」

「沈めようにも魔力結界張られてほとんど足止め出来なかったよ？」

「いやあのブレスは受け止めなかったらこの街吹き飛んでたしさ……。っていうかぶつちやけロサリアさんのほうが強かったし」

これは事実。人間であるロサリアさんのほうが強かった。多分最高火力であったブレスもロサリアさんの聖剣技最高峰のスキルのほうが火力あった。ロサリアさんのスキルならブレスも防げる手筈あるだろうし……。やっぱマジで化け物なんだよなロサリアさん。……っていうかアレ、これが物語ならロサリアさんが倒して英雄になるイベントだったろって今でも思ってる。

「で、なんでそんな事また言い出したん？」

「この前のシルが攫われた件でさ」

「『四罪』の残党の件ですね……」

「あれほんとに『四罪』の残党だったのかなって」

「へえ……。なんでそう思ったん？」

「んー、勘かな？」

「レオっち、そういう勘は割と当たるからな」

「いやね、アイツらの剣が上品だったんだよ」

「剣に品があるのー？」

「喧嘩慣れってか、室内戦闘慣れしてない奴ばかりだったし」

「場慣れしてない？」

「そ。賊ならもつと雑に喧嘩だろ。わざわざ構えてスキル使ってさ。広い闘技場じゃないってのに。そりゃスキルは強いけど。……あれさ、騎士か騎士崩れだったんじゃないかなって」

皆が皆、室内戦闘でわざわざ上段に構えてからスキル使おうとする奴ばかりだった。闘技場じゃないっつーの。天井に刺さって抜けない……なんて事はスキル使えばないけど、いやまあ天井ごと斬り裂けるだろうけど、わざわざそんな選択肢選ぶ必要が無さそうな連中。そのスキルしか使えないならまだしも、どいつもこいつも上級スキル持ち。魔導使いに至っては地下で多分アレ炎系魔導放とうとしやがったし。窒息して自滅する気かったの。

「……きな臭いなあ」

俺の話を聞いたスズが何やら考える。ぶっちゃけ知ってる事話したらスズに考えるのは丸投げしたほうが大体上手くいくので俺、考えるのやめます。

「だからしばらく国外に出ます！ 『白獅子』しばらく中止！」

「ああ、そういう事ね。ならウチはやる事いろいろありそうやからあとで合流するわ。マジク、手伝ってくれへん？」

「いいよ！」

「え、ええと私は……」

「シルはレオっちと一緒に」

「そうぞシル！ 俺、シルがいないと無能だぞ！」

「（レオっちはどっちかと言うとウチらの誰かが一緒におるほうがただの脳筋になるけどな）らしいで？」

「わ、分かりました！ で、国外って何処に？」

「隣国、ホーチエストナツ！ 理由は無い！」

「ま、ええんちゃう？ あそこいまゴタゴタしとるらしいから適当に紛れ込むにはちようどええやろ。どうせなら観光でも兼ねてあつこの主都で合流する？」

と、言うわけでなんやかんや話をした後、俺達は一旦このホスグルブ王国を離れ、隣国ホーチェストナツツに向かう事になった。しばらく離れるんで！ って一応冒険者ギルドに行き先は告げずに連絡だけしといた。ま、魔族の領土に出掛けたり龍神王の所に出掛けたりとか割としてるんでしばらく国から離れるのは良くあるから問題はないだろう。

というわけでとりあえず、目指せ主都『ウツノミヤ』！

17. お互いに偽名身分詐称、これもう分かんねえな

街道を走る荷馬車の中、格子の中で身動き一つも取れずに私は蹲っていた。

(これからどうなるのでしょうか……)

ある街の視察中に、私を守る近衛騎士団は全員倒され囚われてしまいました。乱暴に私を小さな檻に放り込み、馬車を走らせている謎の集団。私に付けられていた近衛騎士団は国内でも有数の実力者達であつた筈にも関わらず、それを圧倒する程の実力を持つ集団。

(……革命かしら。それとも私を手籠にして次期王の座を、とか？)

どちらにせよ、利用するつもりで生かされている筈です。……お父様は無事なのかしら)

「おいどけ邪魔だ轢き殺すぞ!」

「女のほうは可愛いな、荷物に手を出すなって言われてむしゃくしゃしてんだ! 女は生かせ! 男は殺せ!」

(外が騒がしい……? 何かしら?)

「なんだこいつ!? 化け物かぎやあああ!」

「お前らに剣はもつたいたい! くらえケンカキック!」

「ただの前蹴り……ランザスが宙に飛んだ!? 格闘スキルか!」

「スイング式DDT! 袈裟斬りチョップ! くらえシャイニングウィザード! ういー!」

「き、聞いた事のないスキルばかりだ! なんだコイツぎやあああ!?!」

「ふつ、プロレススキル(そんなものはない)に不可能はない」

「くそ、囲め囲め! 槍持ち、相手は徒手空拳の使い手だ! 距離を保ち……刺した槍のほうが折れただど!」

「ウエスタンリアート! アックスボンバー!」

「なんだこの化け物は!? それに今のスキル違いが分からねえ!」

「は？ まったく違うだろニワカか？」

「何を訳の分からない事を！」

「とお！ ダイビングギロチンドロップ！」

「それお前のほうがダメーじあるんじゃないや……？」

「てめえ、絶対に言っってはならん事を！」

「なんでテメエがキレてんだよくそが！」

（外で戦いが！ なんとか脱出を……）

外の喧騒、恐らく街道にいた冒険者が襲われている。この混乱に生じてなんとかと私は考えたけど、揺らしても叩いても格子の扉の鍵は開けられない。

（駄目ね……。せめてこの戦闘の原因であろう冒険者の方が無事に逃げられれば良いのだけど。：近衛騎士団すら壊滅させられる集団だもの。せめて苦しまずに……おや？）

「ええつと……、レオが暴れてる間に積荷の確認確認……」

「あの、あの！」

「え、檻に人……、奴隷商の馬車……？」

「ち、違います！ 攫われて閉じ込められています！ お願いですからどうか助けて貰えませんか！ 鍵が無くて出られないんです！」

外の喧騒とは場違いのように、ひよこつと顔を出した桃色髪の女性に私は懇願した。桃色髪の女性はそれに驚いた表情を見せ、外に向かって叫んだ。

「レ……リオン！ この人達女の人を攫ってる悪党みたい！」

「分かった！ 手加減やめるからこっちは任せとけ！」

「頑張つてー！ あの大丈夫ですか？ 鍵探しますね！」

「お願いします。あ、あの、外で戦われてる方は大丈夫なのでしょうかな？」

「え？ あーリオンなら大丈夫ですよ。強いですから」

「もしかしてお一人なんですか!? いくらお強いと言っても「シルー

終わったぞー」ってええええ!？」

桃色の髪の方が声を掛けて数秒しかたっていない。にも関わらず、終わった。つまり相手を全滅させたという事!？」

出鱈目な強さ。まるで音に聞く隣国の『白獅子』……。いえ、あの方は白髪のはず。目の前にいる方は茶髪だし、『白獅子』はホスグルブですら制御出来ないと言われていた財にも権力にまったく靡かない、自由の象徴。各国が引き抜く為にあらゆる工作をしてもなしのつぶてという話だし、どのように招聘しても音も返ってこない方という事だから今この場にいる筈がない。

「あ、リオン。この檻の鍵見つからなくて」

「そうなん？ てーい」

両の手を格子の間にに入れて、木の葉でも引き裂くように鉄の格子がバキバキと音を立てて折れ曲がっていった。人の身で出来る事なのだろうかと正直常識を疑い始めた。

「あ、あのありがとうございます」

「あーいいいいいよ。絡まれて襲い掛かってきた奴らを振り返りにしてただけだし。悪党って分かれば加減も必要ないし。近くの街なら送っていくよ？ 旅の者なんで土地勘無いけど」

この人達は善人だ。それは確信して言える。であればこそ、私がこのホーチェストナツツの第一王女という事が分かれば余計なトラブルに巻き込まれる可能性もある。だが、誰が味方かも分からない状況で助けて欲しいというのも事実だ。私は藁にも縋る思いで伝えた。

「私はランと申します。……不躰なお願いで申し訳ないのですが、どうか私をウツノミヤまで送って貰えませんか？」

「ウツノミヤですか？ ここホスグルブとの国境付近です。随分と遠

くまで……」

「きつとどつかの国に売られそうになってたんだろうな。可哀想に」

「あの、お礼はたくさん出せると思います！ 必要ならお父様に頼めばきつと地位や仕事だつて用意出来ます！ どうか助けて頂けませんか！」

「うーん……」

茶髪の青年は悩んでいるようだ。それはそうだ。この国の人間ではない旅の冒険者が、いきなり面倒なトラブルに巻き込まれようとしているのだから。

「ねえ、リオン。目的地は同じだし、ね？」

「でも絶対面倒事だぞこれ」

「私はリオンさえ良ければ大丈夫だから」

「ま、シルが良いなら良いけどね。じゃあ俺はリオン、ただの旅の冒険者。こっちはシル」

「リオンと同じく旅の冒険者。宜しくねランさん」

「あ、ありがとうございます！ お礼は必ず！」

「んーお礼ねえ……。攫われたって事ならいま旅費とかないだろうか、後で纏めてその辺払ってくれたらいいかな？ 地位とかなんとかはいらないから。あ、でもなんか像とかで払うのはやめてね？」

「わ、分かりました」

この方達は私、第一王女マカロンを知らない。リオンさんには怪しまれているようだけれど心強い味方となってくれるようだ。何処かで私の長い髪を斬り落とせば、少なくとも主都ウツノミヤまでは私の顔を知る者や私と分かる者は多くはないだろう。

像というのがなんの話なのかは分からないけれど。

18. デイスカウントショップ『ホンキ・ドーテ』

「とりあえず街に着いたらランさん用の着替えが簡単な服買うか」

「必要ですよね」

「服ですか……？」

「ドレスは目立つし旅だと邪魔になるし、それに……ランさんって一人を着替えられる？」

「え、着替えを一人で、ですか？」

「やっぱそのレベルだよ……。地位を用意とか言い出したからただのお嬢様じゃないとは思ってたけど。ちなみに先に言っとくけどシルを召使い扱いしたら放り出すからね」

「し、しませんよそんな事。着替えを一人で……。なんだかワクワクしますね！」

「……シル、出来るだけ簡単そうな服選んであげてね」

「そうですね……」

近くの街に辿り着き、最近増えているというこの街でも開店したばかりのデイスカウントショップ、ホンキ・ドーテにシルとランさんが服を買いに向かったので俺は適当に宿を取りに行った。

デイスカウトショップって発想、この世界に存在しなかったよな？

「久しぶりね！」

宿に向かっていると、俺の前に立ちはだかる仁王立ちの女性。誰だっけ。あーあの、あれだ。ルドランのおっさんの娘っ子だ。えーと……確か……

「ルドラン二世！」

「違うわよ！ 違わなくてもないけど違うわ！」

「うそうそ、ローズマリーとかだっけ？」

「カスリもしてないわ！ ルーランよ！」

「ああ……覚えてる……よ？」

「なんで疑問形なのよ！ほんとむかつくわね！」

何故怒っているのだろうか。こつちとしてはあんたの親父さんから邪魔な像を家に送りつけられている事に怒りたいくらいなんだけど。

「んでルーラン嬢は何故ここに？」

「ふふん、私の店、ホンキ・ドーテのホーチェストナッツ一号店の開店記念だものー！」

「……え、ホンキ・ドーテってルーラン嬢の店なの？」

「そうよ！ 色々な物を一つのお店で安く買える！ そんなお店を作ったかったの！」

ルドランのオッサンが娘は商才があるとか言ってた気がするけどガチやんけ。異世界ドンキ無双し始めてるぞこの娘。

「ルーラン嬢、ただの引きこもりじゃなかったんだな。マジで凄いよ。尊敬するわ」

「……何よ、急に。私の事嫌いなんですよ」

「引きこもって見た目だけ気にしてるお嬢様には一切興味無いって言ったけど、今のルーラン嬢は本当に凄いと思うよ」

「じゃあ私と結婚！」

「する訳ないんだよなあ……。常識を身に付けてどうぞ。っていうか俺じゃなくても選び放題だろ。性格は知らんが見てくれは良くて金も持つてるんだから。そんなに結婚したいのなら適当に選んでこい」

「……これだから何も覚えてない英雄様は」

「え？」

「ふん、いい？ 絶対振り向かせてやるんだから！」

ぶんすか怒りながらルーラン嬢は俺の前から去っていった。いや俺なんかした？ 分からん。っていうかもしかして髪染めた意味ゼ口過ぎ？ 即バレしたんだが？

考えても仕方ないのでとりあえず宿を取った。シルとランさんも宿で合流し、ランさんは簡素なワンピースに着替えていた。

夕食を宿で食べながら、ランさんに攫われた時の状況やらを聞く。いや聞いて何が分かる訳でもないとは思うけど一応ね？ こういう考えるのはスズに基本的に任せていたから苦手である。

「ある街で行われる式典に参加した時の事でした。屋敷内であの一団に襲われまして、私の護衛に付いていた方々も犠牲に……」

「ふむ……」

「あいつら二十人くらい居たけど一斉にその屋敷の中に？」

「いえ、私が見たのは五、六名でした」

「ふーん、絶対手引きした奴いるじゃんかそれ」

「そんな!? 私の屋敷の中に裏切り者がいたと!？」

「で、どんな感じで攫われたって？」

「大広間の扉を開けていただき、中に入った所で急にあの一団の人に捕まってしまって……、振り返ると護衛の方々も既にやられてしま……」

「なるほどね……」

「リオン、何か分かるの？」

「まあ、護衛って人達がグルだったんだろうなあとか」

「まさか!？」

「ていうかさあ、この国今ゴタゴタしてるって話だけチヨロつと聞いてはいるんだけどさ」

「……はい」

「そんな国でレディファーストが当然って思って、行動誤るくらい平和ボケしてるお嬢様な訳でしょ？」

「……どういう事でしょうか？」

レディファーストっていうけど、有事の際に先に部屋に入れるなんて弾除け目的でしかない。先に入れて安全を確認してから入るって事。使用人がいるならせめて、扉を開けさせて先に入れて扉の横で礼でもさせてから入るべきなんじゃ。ていうか護衛を先に入れろ。いつも通り扉開けてもらってその場で礼をしてくれたので入りましたーなんてマジで平和ボケだと思うけど。とは思うが言っても仕方ないし説教臭すぎるな……。っていうかこれくらいなら冒険者長い俺でも分かるんだが。

「……まあ、ちゃんと護衛の教育したほうが良いと思うわ」
「う……」

「……と申し訳ない。別に平和ならそれでいいんだけどね」

「いえ、……ですが私の護衛の方々がグル、というのは？」

「いや戦ってみた感じ、数人で騎士クラスの集団を音も立たずに瞬殺するレベルの強さとは思えなかったから倒されたフリをしてただけだろうなって」

「そんな……」

「リオン、ランさん本当にウツノミヤに送り届けて大丈夫かな？ 身内に敵がいる状況なんじゃないかな」

「ですが私には帰らなければならぬ理由が……」

「理由、ねえ……」

これは思ったよりも面倒そう。……最悪教会にでも放り込めばええか。ランさんの敵（？）がなんなのかも理由も分からんし、深く関わりたくないから聞かないけど教会内で暴れるイコール教団を敵に回すだからな。流石に世界最大の宗教を敵に回す程の勢力はおらんやろ。そんな事したら国中で内乱起こるレベルだし。どうにもならなそうだったら……ホスグルブ王国にある教団本部にクルスさん宛のお荷物ですつつって届けよう。なんとかなるだろ。聖女の威光はマジでどの国だろうが関係ないからな。どの国でも会っただけで泣く人が出てくる。普段ホスグルブにいるから他国なら尚の事。本性

ゴリラなんて誰も知らねえんだ。

「ま、なんとかなるだろう」

「なるの？」

「なるのですか!？」

「なるなる、多分」

知らんけど。と、この時のくっそテキトーな判断をやはり後々後悔する事になるのであった。

19. 「また野盗か」

ホーチェストナッツには、ホスグルブの『五龍』と同じく最強の称号、『星三華』という称号があります。ホスグルブのように『白獅子』や『朱天狐』は与えられる名誉、『蒼麒麟』のように勝ち取る名誉、『黄龍』のように掴み取る名誉、『翠玄武』のように認められる名誉といった区別がされている訳では無く、『星三華』は全て強き者が奪い取る名誉なのです。

歴代の『星三華』の多くは先代から勝ち取った剛の者。もしくは空位ともなれば国中の剛の者がその称号を命を賭けて奪い取りにいく称号。

のはずです。ホーチェストナッツ最強の証のはずなのです。
ですよ？

「今日野盗多くない？」

「そうですね」

「ホーチェストナッツ、昔来た時はここまで治安悪くなかったんだけどなあ」

リオンさんが「なんだ野盗か……」と言って拳一撃で沈めた騎士。『星三華』の『月薔薇』ライオネット。生涯一度も攻撃を受けた事が無いと言われる『星三華』最速の騎士。

まさか『星三華』まで私を狙いにくるなんて思ってもいませんでした。リオンさん達に私を置いて逃げるように伝える前に「殺気……野盗か。ならいいか。シル宜しく」と言って『月薔薇』が、「ふっ、君達その姫君を置いていけば命は見逃してぐはああああ」と述べている口上を聞くのも面倒だと、目の前からリオンが消えたと思ったら『月薔薇』のアゴに下から拳を振り抜き、空高く舞い上がり頭からグシャリと落ちてピクリとも動かなくなってしまった『月薔薇』。

「あ、あの……その方……」

「ん？ 野盗でしょ？ ほっとけほっとけ。そいつの運が良ければ死なないんじゃないかな」

「い、いえ。その、強そうに見えた相手だったので……」

「そう？ シル分かる？」

「いえ、その普段接してる人達からするとそこまでは見えなかったというか……」

「だよなあ」

私は絶句する。『月薔薇』は紛れもなくこの国最強の三柱と謳われた方。リオンさんは普段どんな方々と接しているのだろうか。

……はっ!? いや今この瞬間『月薔薇』は王族の私の前で倒された。つまり当代の『月薔薇』はリオンさんという事になるのでは!?

「ええつと……確か……」

「いやランさんや。お金にはあんまり困ってないから気絶してる野盗から金銭奪い取らなくても大丈夫だよ」

「ち、違います。そうじゃなくて……あつた!」

『星三華』の証。『月薔薇』の証、薔薇水晶とムーンストーンで作られたという薔薇モチーフのネックレス。

「これをリオンさんに」

「いやいらないけど？ 返してあげて？」

「い、いえそういう訳にはいかないんです」

「じゃああげる」

「これがあれば城一つが買える程のお金が動くと聞いた事もあります。きつと持っていて損は無いですよ!」

「じゃあ尚更あげるよ。ウツノミヤに戻って困ったら売りな」

ええ……。地位も金銭もリオンさんにはまったく響きません。まるで音に聞く『白獅子』のような方。

「ん……う？ 街道の向こうに土煙？ 魔力反応……50人くらいか。うわまた野盗かよ面倒だな」

「リオン、付与済みだよー」

「ありがとうシル」

あの旗印……黒と黄色の横縞……まさか最強と名高い傭兵集団『虎軍団』!? 何故この国に!? 南国での諍いに参入していると聞いていたのにまさかホーチェストナッツにいるなんて!?

「さてと……ちやつちやとやるかってあれ？ なんだ『虎』じゃん」

「がっはははは！ ようそこの若いの！ その女を置いていけば見逃して……って『獅子』か!? 久しぶりだな元気にしてたか！ なんだその髪オシャレか？」

「まあそんなところ？ 『虎』は何してんの？」

「おう、まあちよつと入りの良い依頼があったから受けたんだが、今破棄する事に決めたとこだな。シルちゃんも元氣そうだな！」

「はい、『虎』さんも元氣そうで良かったです」

「そうかそうか！ そいつは良い！ で、『獅子』。そのツレのお嬢ちゃんは？」

「ああ、ランさんつつつてね。観光ついでにウツノミヤに送るところ」
「その娘を連れてウツノミヤに観光、ねえ」

傭兵集団『虎軍団』のリーダー、『虎』が私をじつと観察している。

「……そうかそうか、観光、か。いやそいつは面白いもんが見れそうでいいな！ 時間が合えば俺も覗きに行くかな！ ちよいと用事が思いついたんで送っていつてはやれねえが。ひっさびさに一緒にドンぱちやりてえなあー」

「面白いもん？ ギョーザ食べ放題でもあるのか？」

「いいねえ、アレは麦酒にあうもんな。ウツノミヤで会ったら一杯や

るか！ 奢るぞ？」

「お、さすが『虎』の旦那だね。じゃあ宜しく！」

「おう、またな！ がつはははは！」

『虎軍団』は嵐のように現れて嵐のように去っていきました。

「なあシル、知り合いにあったらすぐバレるんだけど」

「まあ、髪だけですからね……」

「あ、あの、あの方々は？」

「ん、『虎』の旦那は腐れ縁っつーか……。俺が冒険者駆け出しの時にめっちゃ世話になった事ある人」

「『獅子』と呼ばれていたのは？」

「昔の冒険者登録してた時の名前だなー。今じゃ『獅子』って俺の事呼ぶの『虎』の旦那だけだわ」

昔の……。今は『白獅子』がいるので『獅子』と名乗るのを辞めたという事でしようか。

「あの、リオンさんはホスグルブの方なのですよね」

「そうだよ」

「『白獅子』は貴方より強いんですか？ ホスグルブ最強と言われる『白獅子』はそんなに強いのですか？」

「ホスグルブ最強が『白獅子』？ いやいやいや、最強は『黄龍』か『朱天狐』でしょ。それこそ俺なんて足元にも及ばないよ」

「『黄龍』ロサリア様……。それに『朱天狐』クルス様……。まさか『聖女』様がそんな……」

「あの辺は人間辞めてるからね……」

ホスグルブ王国とは一体どれほどの魔境なのでしょう。リオンさん程の強者は、称号を賭けた御前試合が頻繁に行われるホーチェストナッツでも見た事がありません。『月薔薇』を倒した時にもスキル

を使っていない、底を見せていないどころか実力を一端も見せていない強者。

そのリオンさんが足元にも及ばないという『黄龍』や『朱天狐』、その『黄龍』と同等と呼ばれる最強『白獅子』。

常に強さを求め続けている剛の者がひしめく国と呼ばれていた事で、私はホーチエストナツツこそが最強の騎士に相応しい国だと思っています。

なんという知見の無さでしょうか。今この国に起きている事を含めて私は知らない事が多すぎる。何も知らされていない。

「また野盗か」

「その首もら「てい」ぐはあああ」

いまリオンさんに蹴り飛ばされ、やはり空を舞い頭から落下し動かなくなったこの国最凶のアサシンと呼ばれていた『黒影』を見ながら私は少しでも多くを学ばなければならないと決心しました。

でもやはりリオンさんおかしいと思うんですよね絶対。

20. 乙女ルーラン、爆進す

買い物は楽しい。目に付いた物は欲しくなる。

私は甘やかされて育った、とはつきり言える。欲しい物は何でも買ってもらった。商売に必要なならと爵位も金で買った成金と揶揄される父も、私の意思を尊重すると更に仕事にも有利になるはずの縁組みをしない。

あの日も私はいつも通り街に繰り出し買い物を楽しんでいた。

「ルドランの娘、ルーランだな？」

「……どなたですか？」

立派そうな服。あくまで立派『そう』な服を着ている男に声を掛けられた。

「ふーん。ま、顔は良いじゃねえか。なあ、俺にちよつと付き合えよ」

「……いきなり無礼ではないですか？ 嫌です。他の方を当たって下さい」

見た目を褒められる事は良くある。良くあるのだから私の見た目は良いのだろう。それは多少の価値はあるのだろうが、今のように面倒を起こす事もある。

「ちつ、面倒くせえな。いいから来いよ」

男が私の腕を掴み無理矢理引っ張る。抵抗を試みるが、この男に対しては非力だ。私は声を上げる。

「痛い！ やめてよ！」

「うるせえ！ 俺は子爵様だぞ？ 黙って来い！」

「やめてって言ってるでしょ！」

渴いた音が響いた。それが私の頬をぶった音だと、暴力など振るわれた事が無かった私は理解するのが少し遅かった。そして理解した途端、痛みを感じ恐怖が襲った。声を上げたかったが、声が出なくなった。周りに助けを求める視線を投げたが、相手が爵位持ちと分かれると皆関わらないように目を背けた。

「手、離せよ」

「ああ!？」

白髪少年、もしくは少し幼い顔立ちの青年だった。この場で助け舟を出すなんて恐らく頭が悪いのだろうと誰もが思うだろうが、私にとってはどんな騎士様より立派に見えた。

「誰だてめえ」

「レオ。ただの冒険者」

「は、馬鹿が平民が貴族様に齒向かうんじゃねえつての!」

その男は拳闘士のスキル持ちだった。高速で拳を振るうスキルをレオが間一髪で避け、いや致命傷にならない程度に当たりながら決して目を逸らさずにチャンス伺っているように見えた。

「死ね!」

男の大振りの一撃を避け、いや肩にもらいながらも相手の懐に飛び込んで伸びた腕を掴みそのまま相手を自身の背に背負い宙に投げ飛ばした。

「路上柔道最強!」

何かを叫んだレオが小石を拾って倒れた相手の上に跨り殴打、殴打、殴打。やり過ぎではとこの時は思ったが、拳闘士中位スキル持ち

だったらしい男に投げたくらいでは反撃で倒されてしまうからこの時に相手を無力化する選択肢しか無かったと、駆け付けた衛兵に取り押さえて男と共に連れて行かれたレオは詰所で語ったらしい。

ともかく私は家に走った。このままでは私を助けてくれた人が罪に問われるのは間違いなかったからだ。父に事情を話す。

「この前依頼した白髪の子だろう。レオくんか。娘が付き纏われている気がするからもし街で見かけたら氣に掛けてやってくれと頼みはしたのだが……依頼でもないのにそこまで……よし、すぐに行こう」

後で分かった話、この時の貧乏子爵は私を手籠にしてルドラン家の資産で自分の家の借金を返そうと企んでいたらしい。レオは罪に問われなかった。

私達が詰所に行くより早く、なんと偶然この街にいた『聖女』様がレオの身元引受人としてきていたのだ。先の話も教会側からの情報提供だった。

「あーいててて」

「もう、すぐ無茶をするんですから」

詰所で『聖女』様に治療されているレオに会えた。正直、仲睦まじそうに見えた。

「あ、あの、私ルーランと言います！ 先程はありがとうございました！」

「いいっていいって気にすんな」

「やはりレオくんか。娘の事、本当にありがとう。何か礼をしなくては」

「そういうのいいって言っても商人には駄目かな。じゃあこれからもたまに依頼くれよ。ちよつと色付けてくれたら嬉しいかな」

この時から父のレオに対する信頼は絶大だったと思う。そんなやりとりを見ながら私は『聖女』様の顔を見た。見た目は良い、と皆に言われてきた私だが、そんな私より全然『聖女』様は綺麗だった。

私には見た目しかないのに。『聖女』様は全てを持っている気がした。思わず聞いてしまった。

「あの、失礼ですがお二人はその、良い仲なのでしょうか」

「ええ、私達はい「友達です」……お友達ですよ。今は」

お二人の仲は進展している訳では無さそうだった。まだ、きっと私にもチャンスはある。そう思った。父が冒険者であるレオに依頼を出すのだから会うこともあるだろう。私は戦えない。冒険者は出来ない。なら私の長所を伸ばすしかない。

今まで意識した事のない美容に目を向けた。美しさは作れるらしい。私にはそれを伸ばすしかない。父と母に相談しながら、私は街で一番の美貌と呼ばれるようになった。

そんな中、レオは新しい仲間を増やす度にどんどん冒険者として有名になっていった。そしてついに『白獅子』となった。

『白獅子』の授与式には私も顔を出した。久しぶりにレオに会う。私を見て綺麗と言ってくれるだろうか。レオがパーティーメンバーと共に大広間に現れた。

パーティーメンバーは皆、世辞抜きに可愛かった。皆、違う綺麗さや可愛さがあった。

私は声を掛けずに帰った。自信が持てなかったからだ。

だから自信が持てるよう頑張った。おそらく世界に私一人だけだと思う『美容』スキル持ちになる程頑張った。努力でスキルが生まれるなんてこの世の摂理がひっくり返る出来事らしいが気にしない。必要なのは過程ではなく結果だから。

国一番の美姫、などと呼ばれるようになり、私は父にレオと共にやりたい事を告げた。父は取りなしてみるとは言ったものの良い返事

は帰ってこなかったとの事。そしてあの件で言われた言葉。

「悪いね。見た目だけ磨いてるような女に興味ないんだルーラン嬢」

つまり私は方向性を初めから間違っていたらしい。ショックはショックだが、だからどうしたという話だ。今更諦められる訳もないのだ。

私は戦えない。だから父を見習い商売を始めた。

私には商才があるらしい。

一つは平民向けにデイスカウントショップ。

一つは貴族向けに美容を売り物に。

どちらもすぐに軌道に乗った。見ている。何せ私は国一番の商人ルドランの娘。ただの見た目だけ磨いている女ではないのだ。あの時の事などカケラも覚えていない英雄様を、振り向かせるだけの女になるのだ。

21. 止まらないリオンコールと増える観客

「あ、あのリオン……」

「いいかシル。後ろを振り返っちゃ駄目だ。絶対目を合わせるな。あいつらも一応言った事は守ってるから」

「う、うん……」

シルさんが少し怯えています。私達三人から少し離れ、今二十名くらいがゾロゾロとこの旅に勝手に付いてきています。

この国では闘いは娯楽です。『星三華』を賭けた御前試合は少なくとも週に一から三回は闘技場で行われ、常に満員の人集りの中で行われています。つまり『星三華』は皆この国では有名人であり誰もが認める実力があり、憧れでありまさしく華なのです。『星三華』はこの国の開国時に作られた称号で、その三つを全て統一した者は次期国王になる権利を得る事さえ出来ます。出来ませんが、開国八百年の歴史でそれを成し遂げたのが開国王のみです。二つまで手にするものは何人も現れました。けれど一つでも持てば挑戦者が常に付き纏い、二つ手に入れた者は例外無く三つの頂きに手を掛ける前に全員が命を落とすのです。……この辺りは国の力が働いていると言われています。

なので今は一つ以上を求める者は現れなくなりました。

元『月薔薇』ライオネットはあの後、頭を丸めてリオンさんに弟子入りを志願してきました。リオンさんは面倒そうに断りましたが、しつこく食い下がったライオネットに「ウツノミヤまでの旅に勝手に付いてくる？　なら一定の距離を保って俺たちが街に泊まる時も郊外で野宿するつつーなら見逃さなくもないけど……」と言ったりリオンさんの言葉を守り付いてくるライオネット。そして気付けば野次馬が増えて今二十名です。

「ぐはああああ」

「「「リ・オ・ン！　リ・オ・ン！　リ・オ・ン！　リ・オ・ン！　」」」

恐らく誰かに雇われた刺客をまたリオンさんが倒しました。上がるリオンさんコール。そしてリオンさんに付いていけば面白い闘いが見れるぞと増える野次馬。なんせ自称弟子の元『月薔薇』ライオネットが行く先々でリオンさんの強さを語っているみたいですからね。あの『月薔薇』がそこまで!? と仕事を放り出してまで付いてくる人もいるみたいです。リオンさんはウンザリしていますが、直接干渉してこないのに関わらないようにしていますね。

あ、次の方が来ましたね。もはや刺客とかじゃなくてただのリオンさんへの挑戦者になってきています。お国柄といえどそんな感じかも知れません。

「ふっ……、君がリオンか」

「え、もう次？ 面倒な国になったなほんと」

その方は『翠百合』アルカ。女性の『星三華』として現『星三華』の中で最も人気がある大変美しい女性です。勝った男に抱かれると公言している女性でもあります。人生で一度も負けた事がないそうです。『身体強化』と『対状態異常』に『聖騎士』中級スキルまで使える隙の無さ、『翠百合』はシンプルに強いのです。

「正直、彼女の首をと言われた事に従う気は無いが君の強さに興味がある！ 勝負だ！」

「いや受けるとか言っていないが？ マジでなんで誰も話聞かないの？

……そいや！」

「ぐほおおお」

リオンさんは男性女性、敵であれば関係なく容赦がありません。『翠百合』を腹部への蹴り一撃で沈めました。あまり女性から聞く声ではない声をあげていましたね。私は『翠百合』さんに近付きました。彼女は負けを認め自ら『翠百合』の証であるペンダントを差し出しました。いえ刺客相手に近づくなど言われればその通りなのですが、彼

女の人となりは知っていますし、刺客として来た訳ではなさそうでしたので……。

「リオンさんこれ」

「何それ。ああ、なんかすげえ価値があるとか言ってたやつ？　いらんいらん」

「いえ、その三つ集まると王になる資格を得ると言われているもので貰って頂かないと……」

「それを聞いたら尚更要らないんだが？　ランさんにやるよ」

「ええ……」

リオンさんにとってお金どころか国も王も価値を見出せないようです。『月薔薇』も『翠百合』も驚いています。

「まってくれ！」

アルカさんが声を上げます。

「私は自分を限界まで鍛えたつもりだ。地位や名誉が目的でないなら貴方は何故そんなに強くなれたのだ！」

「限界か。……もともとありもしない限界にこだわると己の力に疑問をもつようになり、しくじったりできなかつたとき、「ああ、これが俺の限界だ。もうダメだ」とギブアップしてしまう、と俺の心の師匠が言っていた」

「貴方の心の師匠……名はなんと？」

「俺にとって神様みたいな人でね。神様なんて言ったら教会に怒られちまうから言えねえな」

「いえ、先程の言葉私の心に深く刺さりました。是非お聞かせください」

「……闘魂の神イーノキ」

ギャラリーがざわつき始めました。闘魂の神。初めて聞いた神の名。この国に残されているニツコーの地下に眠る古代施設を調べれば分かるのでしょうか。いえ、古代文字は複雑怪奇で解読も進んでいませんし……。

ともかく、それはこの国に新たな信仰が始まった瞬間でした。

「闘魂の神イーノキ……。是非その精神を私もあやかりたいものだ。それはそれとして……仕方ないな。私は君に抱かれてやろうか」

「いや、頭おかしいのかお前。お断りだが？」

「何だ?! 私が悪しくないと言っても言うのか!？」

「美人だろうがなんだろうがいきなりそんな事言いだす奴相手にする訳ないだろうが」

「おかしいだろう! 私の身体目当てで私に闘いを挑んでくる奴なんて腐る程いたんだぞ!」

「おかしいのはお前の身体目当てで闘いを挑んだ奴らだよ」

「なん……だと……」

「王女の首はまだか!」

我が主の苛立ちが治らない。失笑しそうになるのを堪える。革命はほぼ成ったけど、王女だけ難を逃れた。宮廷内の動きを怪しんだ王がギリギリで逃した王女。うん、無能では無かったけど逃した先にも私たちの手は伸びていてちゃんと王女も捕獲出来た、までは良かったんだけどね。

「申し訳有りません。『月薔薇』が敗れたとの報告がありました」

「な、なんだと!？」

ホスグルブ王国の『五龍』と並ぶ最強の証。特に闘いこそ全てであるホーチェストナッツにおいて最高の名誉である『星三華』の称号は軽くない。常にその称号を巡る闘いが許され、日々研鑽されているこの国の最高戦力。その一角が敗れたのだ。

「そんな馬鹿な……。ありえん。『月薔薇』だぞ!? どんな卑怯な手を使つて勝つたというのだ……」

「『月薔薇』を倒した男に興味があると、命令拒否を続けていた『翠百合』が向かいました」

「ははは！ そうかようやく『翠百合』が動いたか！ どんな卑怯な手を使つて『月薔薇』を倒したか知らんが、『翠百合』には毒も麻痺も効かんからな！ どんな奴が王女についているかは知らんがこれで終わりだ！ そうだな!？」

「はい、その通りかと」

「『陽牡丹』はどうしている！」

「指示通り城内で待機しております」

「そうか、万が一の備えは問題無いな。ふん、王も王妃も不慮の事故で亡くなったからな。仕方なく私がこの国を仕切つてやるのだ。王女も早く処理しておけ」

焦り過ぎて我が主人の言っている事がガバガバなんだよな。不慮の事故で処理をするけど早く首持つてこいとか、口を開かないほうが良いだろこのアホ大臣。アホだから操りやすいんだけど頭が悪過ぎるよね。ま、全部自分の指示でやってると思つてから責任もこいつに取らせればいいだけなんだけど。

「そういうえば万が一、『翠百合』が倒されてしまうと証が二つ、王女の手元に行つてしまいますが……」

「ふん、そうなった場合、古来よりこの国の暗部が動く事になっているだろうが。この国最凶のアサシン、『黒影』がな！ ふははははははは！」

もうやられてるんだよなあ。事実知つたら発狂するのかなコイツ。それはそれで面白いから黙つておこう。私は私でやることあるしね。

22. マジク母、謎ばかりばら撒く

仮面ライダー、本郷猛は対魔忍である。

「ええ!? ……夢か。とんでもない夢を見た」

まだ前世の知識の夢も見たりするんだなと思いつながら一人部屋のベッドから降りて着替え剣を取り、水を飲んでから宿の中庭へ向かった。

陽も登らぬ早朝からひたすらに剣を振る。日課となるコレをやらなければむしろ調子が悪くなる。

「……ああ、集中出来てねえ。今日は辞めるか。あんな夢見るからだな」

ひたすら剣を振ってみたものの雑念が混じる。

「はい、タオル」

「ああ、ありが……ッ!」

差し出されたタオルを受け取ろうとして、差し出した人物、いや魔族を見て距離を取り剣を構える。魔力が見える左眼を無理矢理ぶち込まれて以来、気配も何も感じずに近付かれたのは初めてかも知れない。いやスズならその気になれば余裕で近付かれると思うけどそんな事やらないし。

「私の左眼、気に入った?」

マジクの母親がやってきた。

「そんなに睨まないで。せっかく遠見でマジクが近くにいないの確認出来たからきたのに失礼しちゃうわ」

マジクの母親、名は知らない。教えてくれないし、なんならマジクも知らない。マジクと同じ薄青色のロングヘアに右眼は赤眼、左眼は俺の眼だから黒眼。生まれたてのマジクを捨てたクズである。本人曰く、人間との合いの子を育てていると他の魔族から狙われるから仕方なかったとか言ってるが、やりようはいくらでもありそうだからクズなのは間違いない。マジクが唯一、本気で出会った瞬間から殺そうとする程怒りを向けるやつなのは仕方ない。

「ああ、左眼良く馴染んでるみたいじゃない。なんなら右眼も交換し

「ちやう？」

「その前に殺すが？」

「無理ね。さすがに付与魔導抜きじゃ私には勝てないでしょ？」

凶星である。目の前のコイツ、全力のブチギレマジクをいなして逃げる事が出来るくらいの化け物である。全力マジクなんて都市数秒で滅ぼしそうな火力持ちなのに。……シルの付与魔導込みでも身体面では上回れるけど、攻撃当てる自信がないんだよなあ。負けはしないが勝てもしない気がする。

「だいたいなんで俺の眼なんて欲しがるんだよ。良く見える、それくらいだろう」

「ま、良く見えるくらいしか使えないでしょうね。アナタじゃ。その良く見える、も他からすれば異常な見え方でしょうけど。私だってアナタを魔診眼通して診なきや気付かなかった。他の魔族だってアナタの眼に気付いていればとづくに狙っていたでしょうし」

魔診眼っていうのかこの眼。マシンガン……響きはかっこいいな。魔力見えたりスキルの予兆把握出来たりすつげえ便利なんだよなこれ。魔力だって人によって波長みたいなもんが違うとか知らなかったし。……これ相手が変装してても即行見破れるよね。そんな眼より欲しいとかどういう事？

「アナタがまったく才能の無かった人間だから宝の持ち腐れなのよ。この眼」

はつきり言う。気に入らんな。

「まったくじゃねえし。パリーくらい使えるし」

「アナタのそれ、パリーじゃないわよ？」

「……は？」

「アナタがパリーと言って使ってるからパリーだと周りも思ってるんでしょう。でもね？ パリーが同スキル帯以上の攻撃スキル弾ける訳無いじゃない。スキルが変異するとかいう希少事例もあるからそれと勘違いされたとか？ まあそれはそれで例がほとんど無いから勘違いされても仕方ないんでしょうけど」

「え、パリー……じゃない？」

「そうよ。聖剣技最上位なんて百年に一人くらいしか使えないスキルをパリイ如きで防げる訳ないでしょ。世界統一とか魔王討伐とか、歴史に名を残す人間が覚えるスキルなのに」

「防げたけど……?」

「身体能力でゴリ押ししただけでしょ。ゴリ押せるからおかしいんだけど」

「いやいやいや、付与魔導無しでも聖剣技下位くらいまでギリギリいけるが?」

「そうね。パリイじゃないもの」

「え、じゃあコレ何なの?」

「うーん、秘密♡」

「うっぜえマジでぶっ殺すぞババア」

「あら、見た目はヒトで言うところと18くらいなんだけど? 老けないし」

「中身はいくつだこらあ!」

「秘密♡ ジャーね♡」

急に現れて謎だけばら撒いて去っていきやがった。俺の眼の話は? 俺のパリイの話は? ……いや落ち着け、アイツの話を真に受けちゃ駄目だ。本当の事を言ってるとは限らん。マジクがない時に来たって事は一応話をしに来たんだろうけどこの眼を狙ってかも知れ……いや今のタイミングなら間違いなく奪われてたからそれは無いか。ほんと何しに来たんだアイツ。

「リオン、あれ……」

「シル、見ちゃダメだ」

今日も今日とて目指せウツノミヤ。背後に五十人程赤いタオルを首に掛けた集団がいるが気にしちゃいけない。タオルの端持ちながら「ファイツ!」とか言ってるが無視無視。赤いマフラーもいるな。まさかライダーで対魔……いやないか。闘魂神イーノキとか言って適当に喋り過ぎたかな。あの後も適当に喋ってたらみんな妙に真剣な顔で聞いてたから引くに引けなくなっちゃったし。

「元気ですかー! 元気があればなんでも出来る!」

ランさんまで赤いタオル首に掛けてやってるんだよなあ。今後ろの人達に向けて叫んでるし。闘いが娯楽の国との親和性あり過ぎて草生える。マジで後で誰かに怒られないかな俺。クルスさんとかクルスさんとかクルスさんとか。

「そういやシル、この左眼さ、魔診眼っていうらしいよ」

「魔診眼……あれ、魔診眼って昔の魔王が持ってた瞳とか言われるやつじゃなかったかな……。確かリイナ師匠がそんな事言ってたような……」

「そうなの？ でもあの人、俺の眼安定させてくれた時なんにも言わなかったけど」

「うーん、リイナ師匠なら気付いてそうだけだなあ……」

「レオさんは今何処にいるか把握していますか？」

「隣国ホーチェストナツツでウツノミヤに向かって徒歩で旅をしているようです。その……」

「その、なんですか？」

「いえ、王と王妃が亡くなったばかりの王都へ向かい、王女と赤い布を巻いた集団を連れて一緒に向かっているとの事です。王女の護衛をしているようだとか……」

「……私宛の国葬の招待状が先程届いていましたよね？」

「はっ……」

「すぐに発ちます。いいですね？」

「はっ！」

23. 裏の話とリオンを待つ最恐の敵

「すまない。スズ、マジク。わざわざ出向いて貰った」

「ええよ。うちの調べたかった事と一致しとったし」

「……甘いもの食いたい」

「レオからマジクが好きだと聞いている甘味家のお菓子をたくさん用意させてあるよ。遠慮しないでいいからね」

「はい」

シルを攫った連中、敵は誰なのか。それを調べとった際、ロサリア様を通して王家から依頼を受けた。『翠玄武』の研究室の搜索依頼。そのうちやろうと思うとったけどこのタイミングで来たとなるとほぼ黒やと思つて受けた。んで報告兼ねてロサリア様の邸宅にお邪魔させて貰ったけどやっぱデカいな。でも洗練されとる。無駄な飾り立てもなく貴族、いや王族の持ち家にしてはかなり質素といえるはずなのにそれを感じさせないのはロサリア様がそこにいる、というだけでどんな飾り立てよりも輝く本物がいるからなんやろうか、とポリポリとクッキーを食べるマジクの頭を撫でながら考える。

「単刀直入に言うと、国に報告しとった研究施設三ヶ所、他隠し持つとった研究施設や隠れ家……いや会合場所かな？　ともかく五ヶ所、全てもぬけの殻やつたわ」

「五ヶ所か。想定より多かったな。会合場所とは」

「複数名定期的に出入りしとったみたいやけどそれ以上は分からん。隠し部屋もあつたけどなーんも残つとらんかったし。んで本人はどこなん？」

「消えたよ」

「ふーん。じゃあ王家の情報なんもかんもすっぱ抜かれた後なん？」

「兄は最初から信用していなかったからね。最低限の情報を渡しながら泳がせていた訳だが、向こうも泳がされている事に気付きながら立場を利用していたみたいだ」

『五龍』の一角まで渡して？」

「そうだ。『翠玄武』は空位となる。王家の大スキャンダルだよ」

「笑顔で言わんといってくれる？　うちらしか知らん大スキャンダルを情報として渡されても困るわ。聞かんかった事にしたいくらいやわ」
「どうせ君ならそのうち知る事になるだろうからね。ならこちらから開示してしまったほうがこちらとしても分かりやすいだろう？　分かっている事を話そう。やつらは『形天』と名乗っている。シルを狙ったのは彼女の付与魔導の特異性からだろう」

「……『四罪』は『形天』の一部やったん？」

「そうだ。この国での活動の一つの形だったようだ」

「藪を突いてもうたつて事ね……。この国での？」

「どの国でも悩まされているんだよ。『形天』には」

「目的は？」

「混沌、らしい。それしか分かっていない」

「『形天』ねえ。……確かこの国の都市間の行商許可やら物流管理に最近噛んどる組織、関税やらで小銭、まあ額は大きいけど稼いどる、そんな組織の中に確かそんなワードがちらつと聞こえた話があったと思うとつたわ。……なあ、もしかしてやけど下手するとこの国の物流、既に握られとらん？」

「……兄にすぐ確認しよう」

「これ貸しでええ？」

「ああ、勿論だ」

「ところで……」

話しとる間ずーっと気になった事がある。ロサリア様の隣に座る青いドレスに身を包んだ金髪ショートの美女。同席させとるからにはロサリア様の腹心かなんかなんやろうけど。

「隣の美女いつ紹介してくれるん？」

「あら、スズの眼でも分らないかしら？」

「え、レイラ……様？」

「ええ、『蒼麒麟』としてではなく、王女レイラとして隣国の国葬に招待されたの。だから普段染めてる蒼髪から元の髪色に戻したのよ。ロサリア兄様と同じ髪色でしょう」

「いや、髪色つちゅーか……。所作が違い過ぎて分からんかったわ」

レオっちなんて髪色変えてもなんも変わらんのになあ。

「ホースチェストナツツに行くんでしよう。私も行くから同じ馬車で行かない?」

「なーんか口調が違い過ぎて違和感あるわ」

「ふふ、この屋敷から出たらいつものレイラに戻るわよ」

「それはそれで勿体無い気もするわ」

「カミュ……カミュ!? その『陽牡丹』のカミュってまさか自称モンスター研究家のカミュ!?」

『星三華』最後の一人、『陽牡丹』カミュの話をリオンさんとしょうかと思ったのですが、名前を出した途端にリオンさんの様子がおかしくなりました。

「確か昔そう名乗っていたかと思います」

「あいつ……この国にいたのか。帰るか」

「え、あの、確かにカミュは強いですが、今までの闘いぶりから思えばリオンさんのほうが強いかと……」

「ランさんはあいつの恐ろしさを知らないんだ……」

震えるリオンさんの肩にそつと触れるシルさん。

「リオンほんとに怖がってたもんね」

「あの、一体何が……」

「あいつ、いつもコート着てるだろう?」

「ええ、そうですね」

「コートの下知ってる?」

「いいえ……まさか……裸……とか?」

「裸ならまだいいんだけどな」

リオンさんは遠い眼をしています。

「昔、あいつが挑んで来た時、あいつコートを脱ぎ捨てたんだけどさ。まあ全裸ではあったんだけど」

「あ、全裸だったんですね」

「身体中にウインナーを巻き付けててさ」

「え？」

「モンスターの肉で作った筋力養成ギブスだー！　とか言ってさ、身体中にウインナー巻き付けてるの。意味分かんないだろ」

「ええ……」

「あ、こいつヤバいと思ってさ。全力で腹に蹴り入れたの。多分あいつの内臓破裂しただろうし骨もボツキボキになるくらい全力で。何なら殺す勢いで」

「は、はあ」

「そしたらアイツ、倒れながら気持ち良さそうな顔で射精したの……」
「ええ……」

「しゃ……。言葉の意味を理解し思わず赤面してしまいました。いえ確かに恐ろしい狂気なんですけど。全然言ってる事分らないんですけど。」

「俺怖くて逃げちゃったんだよ。そしたら噂でさ。アイツ「次は俺が抱かれる番だ！」とか言ってるらしいって聞いてさ。抱かれるって何さ。マジで意味分らないんだよ。怖くない？」

「それは……」

「それでさ、たまにアイツの狂気な噂が聞こえてくる訳。ほら、毒持ちのモンスターでビクサーペントっているじゃんか。鍛える為にビクサーペントにわざと……まあ大事なところ嚙ませて十日間もがき苦しんだんだと」

「解毒しなかったんですね」

「んで死んだんだって。ビクサーペント」

「苦しんだのビクサーペントほうなんですか!？」

「怖くない？」

「恐ろしいですね……。知りませんでした。あの方、普通に前『陽牡丹』を倒して今の地位で闘い続けてますが、そんな方には見えませんでした……」

「常人の振りしてる狂人とかホント勘弁だよな……」

「リオン、でも待ち合わせ場所ウツノミヤにしちゃってるし……」

「分かってる。分かってるんだけど……。アイツがいるってなると恐怖の都に思えてきたわ」

『陽牡丹』カミュ。まさかりオンさんとそんな面識があっただなんて。世の中は広いです。ところで抱かれる、という事はリオカミュって事でいいんですよね。次はって事はカミュリオがあつたという事でいいんでしょうか。大事な所ですね。私気になります。

24. 赤いタオルを掲げる意味とは

「……五百名ほどいますね」

「そうですね」

馬車でリオン、いやレオ一向に追い付いた『聖女』と、『聖女』の付き添いで来た神殿騎士団。今は遠目からレオ一向を見ているが、その異様さに驚いていた。レオとシル、マカロン王女を先頭に一定の距離を置きながら赤いタオルを掲げながら付いてくるその数は五百名に膨れ上がっていた。神殿騎士団団長は渋い顔をしながら『聖女』に言った。

「イーノキ教を名乗る集団をマカロン王女と『白獅子』殿が率いています。……『聖女』様。我々としてはこれは見逃す訳にはいかないかと」
「何をでしょうか」

『聖女』は涼しい顔で答えた。

「何を、ですか。『聖女』様。如何に『白獅子』殿と懇意があるからと、我らの教えに叛くような真似を見逃す訳にはいきません」

「いつ、『白獅子』が私達の教えに背いた、と？」

『聖女』の言葉に圧力が入る。団長は思わず身がたじろいだ。

「ご、誤魔化せれませんぞ。我らの教えがありながら別の、イーノキ教なる教えを」

団長はされど答える。答えるが動揺から言葉に詰まる。

「聖教会は唯一つの神を称えよとの教えは無かったはずですが？」

「それはそのような考え自体が有り得ぬと！」

いくら『聖女』の言葉と言えども流石に看過出来ないと語彙を強く反論した。これが分からぬ貴女ではないはずだと。しかし、『聖女』からは更に冷たい視線を向けられた。

「貴方の眼は節穴ですか？」

「な、何を」

分からない。今見ているものなら同じものしか見えていないはずだと団長は再度彼等を見るが分からない。彼らも『聖女』と神殿騎士団に気付き、なんだなんだとこちらを見ている。

「見なさい。彼らの掲げる赤い布を」

「それが……『赤』、まさか」

「赤は『朱天狐』の色。聖女を表す色。聖教会の象徴たる私の色。つまり彼らは私達聖教を何ら他意にする意思はなく、私達に属した上でその闘魂の神イーノキを讃える、そういう意思表示ですよ」

「なんと……ですがそれでは何故『白獅子』殿はこの国で今、新たな教えを……」

「……今、聖教内にあの『形天』の人間が複数名入り込んでいるとの事です」

「それは!？」

「今後、教会内で意図的に派閥争いが行われる可能性があります。それに乗じて『形天』の人間が台頭してくるかも知れません。その場合、追いやられるのは清廉潔白かつ出世欲など無い真なる殉教者でしょう。そんな彼等の行く場所は何処になるのか分かりますか」

「まさか、その為のイーノキ教。イーノキ教が『聖女』の庇護の元に広まるとあらば確かに奴等も迂闊には手を出せない!」

「そうです。『白獅子』は我らを守る為にイーノキ教を作ったのです」

「なんと……なんという事だ」

神殿騎士団団長は己の浅はかさに恥じる。それは話を聞いていた神殿騎士団の団員達も同様だ。

「ふふ、彼等が私達に気付きこちらを見て動揺しているようです。行きますよ。武装は解除して下さいね?」

「はっ!」

「という事で宜しいんですね? レオさん」

「アッハイソウデス」

突然神殿騎士団を率いて現れたクルスさんに「イーノキ教は聖教の管理下って事でええんやなおおん? (意識)」と笑顔で言われた。これブチ切れられてないか。怖い。背後にゴゴゴゴって擬音が可視化してる。思わず正座しちゃったね。いや当たり前っちゃ当たり前だ

けど。クルスさん背後の神殿騎士団の方々も俺を見てなんか神妙な顔をしておられる。クルスさんここに来るまでに暴れてちやったりした？　なんかごめんね皆さん。

ちなみに髪色落とせと言われたので素直に染めてた茶から白髪に戻した。おこなクルスさんから言われたらしやーない。いやー俺がリオンじゃなくて『白獅子』だつてばれちやうなーまいったなー。え、みんなそうだと思ってた？　まじ？

「リオンさん『白獅子』だったんですね……」

ええそうです。気付いて無かったの貴女だけだったみたいですよランさん。いやマカロン王女様。いえ貴女は貴女で今家族の国葬が行われるのを知り悲しみに暮れてるんでしょうけども。

「つまりレオカミュ……」

ん？　何考えてます？

「いえ、父と母の事なら城から逃がされた時に既に覚悟は出来ておりますので……」

あ、そうなんです。いま不穏な単語が聞こえた気がしたのは気のせいでしょうか。

さてはくっそ遅しいなあんだ？

「マカロン王女を狙うのは中止、ですか」

ホースチエストナツツの国王と王妃を毒殺し、混乱に乘じ現在政務を摂る大臣パッパパーは自身のメイドに向かい怒鳴り散らしていた。

「当たり前だ！　屈辱だ！　わざわざ赤い布を掲げた多数の人間を連れよって！　分からぬワシではないわ！　王女の後ろに『聖女』と教会が付いたとこれみよがしに見せ付けよって！　終わりだ！　もうワシは終わりだ！」

赤は『聖女』の色。一国の王女がその色を使う意味が分からぬ訳が無いという。まったく分かってないんだけど分かっているらしい。

「……はあ、つまらないわね」

「何？」

「もういいわ」

それだけ言つて、メイドは大臣の首をあつさりと刎ねた。

「良かったのですか？ 『翠玄武』」

「ええ、もう使えなそうだし」

メイド、こと『翠玄武』に控えていた他のメイドが声を掛ける。

「大臣は自分の犯した罪の大きさに耐えかねて自死したのよ」

「……どう見ても他人が首を刎ねた後ですが？」

「後で首を縫い付けて服毒死の体にしといてちょうだい」

「面倒ですね」

「じゃあ焼死でいいわよ」

「それなら。それでこの後はどうするのです？ 王女の後ろについてこの国を操るのですか？」

「いえ、残念ですけどしばらくは関わらないわ。『聖女』も『白獅子』も出てくるなんてツイてないわ。せつかく操りやすい馬鹿見つけたのにね」

「……我ら『形天』としては今回の目的は達しています。国を手にするのはついででしたから構いません」

「そうね。ま、でもこのままちよつとは癪だし、最後にぱあーつと派手にやっちゃいましょう」

「ええ、我らは混沌を招く者。その目論見は正しい」

「驚くかなー。楽しみだなー」

「きつと驚くでしょう。まあ、貴女が関わっている時点でホースチエストナツツとホスグルブの亀裂は既に決定的ですがね」